



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	ハンの巡行 : ジョチ・ウルスにおける〈移動〉のポリティクス
Author(s)	諫早, 庸一
Citation	スラヴ研究, 70, 105-136
Issue Date	2023-08-31
DOI	https://doi.org/10.14943/SlSt.70.105
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/93569
Type	departmental bulletin paper
File Information	04_Isahaya_Yoichi_Slavic-Studies_70.pdf



ハンの巡行

—— ジョチ・ウルスにおける〈移動〉のポリティクス ——

諫 早 庸 一

はじめに

—— 南北移動と東西移動をつなぐ ——

ジョチ・ウルスはモンゴル帝国（1206～1368年）の4つのウルス／くにの1つとして、13～14世紀に東はイルティシュ川から西は東欧まで、南はホラズムやカザフ草原から北はシベリアまで展開していた。本稿はこのウルスの特に成立期（1240年代前半）からバト朝の断絶（1359年）までのおよそ1世紀間を対象として、この時代のジョチ・ウルス史を特に君主の〈移動〉の観点から再考するものである。ジョチ・ウルスのみならず、近年のモンゴル帝国史研究は〈移動〉を非常に重視している。例えば、チャガタイ・ウルス史家のミハル・ビランらは、モンゴルの征服・統治における効率性を、その政治戦略、具体的には人・物・情報といった資源に高い「機動性(mobility)」を与えたことに帰している⁽¹⁾。さらに、ジョチ・ウルス史家マリ・ファヴロによって近年刊行されたジョチ・ウルス通史である『オールド』は、アルフレッド・クロスビーの「コロンブス交換(Columbian Exchange)」を意識して⁽²⁾、モンゴル時代におけるモンゴルを主体とする人・物・情報の〈移動〉を「モンゴル交換(Mongol Exchange)」と表現している⁽³⁾。

本稿では、遊牧政権たるモンゴル帝国の根幹に関わる君主の〈移動〉について、近年の研究が「帝国の巡行(imperial itinerance)」と「移動牧畜(mobile pastoralism)」とを区別して論じながらも、ジョチ・ウルス君主の〈移動〉については、その移動圏をヴォルガ下流域に固定していることを踏まえ、ジョチ・ウルス君主たちの〈移動〉が、これまで語られてきたような固定的なものであったのだろうかという問いを立てて考察を行う。問題の前提とし

1 Michal Biran, Jonathan Brack and Francesca Fiaschetti, "Introduction," in Michal Biran, Jonathan Brack and Francesca Fiaschetti, eds., *Along the Silk Roads in Mongol Eurasia: Generals, Merchants, and Intellectuals* (Berkeley: University of California Press, 2020), pp. 1–24. 2010年から15年にかけて、ヘブライ大学でミハル・ビランを中心に展開した国際プロジェクトも「モンゴル帝国期ユーラシアにおける移動・帝国・文化接触(Mobility, Empire and Cross Cultural Contacts in Mongol Eurasia)」をその表題としており、〈移動〉がキーワードの1つとなっている(<http://mongol.huji.ac.il/>)。

2 Alfred Crosby, *The Columbian Exchange: Biological and Cultural Consequences of 1492* (Westport, Conn.: Greenwood Pub. Co, 1972)。

3 Marie Favereau, *The Horde: How the Mongols Changed the World* (Cambridge MA: Harvard University Press, 2021), pp. 1–8; 諫早庸一「書評：櫻井智美・飯山知保・森田憲司・渡辺健哉（編）『元朝の歴史：モンゴル帝国期の東ユーラシア』 勉誠出版、2021年」『北大史学』62号、2022年、50頁；諫早庸一『ユーラシア史のなかのモンゴル帝国』みすず書房、2023年。

て、モンゴル帝国全体を念頭に置いたうえでジョチ・ウルスの〈移動〉について言及する研究はみな、バト（治世 1227～56 年）や彼を実質的に後継したベルケ（治世 1257～66 年）といった初期の君主たちについてのもののみを対象としている。イオハanneス・デ・プラノ・カルピニ（1182 頃～1252 年）やギョーム・ド・ルブルク（1215 頃～65 年頃）、マルコ・ポーロ（1254～1324 年）といった外からの訪問者たちの記述に、アブー・アル＝フィダー（1273～1331 年）やアフマド・イブン・ファドル・アッラー・ウマリー（1301～49 年）といったマムルーク朝（1250～1517 年）の著述家たちの地誌を組み合わせると、初期のジョチ家の君主たちがヴォルガ下流域のサライを冬営地として、夏は北上してウケク、あるいはブルガールまでも至っていたことが分かる。

その一方で、別の文脈でジョチ・ウルスの後代の君主の〈移動〉に言及する研究が存在する。それらが重視するのが、イブン・バットウータ（1304～68 年もしくは 77 年）の記述である。黒海を縦断し、クリミア半島に上陸した彼は、その後に東進して北カフカースの都市マージアル付近にあった時のジョチ・ウルス君主ウズ・ベク（治世 1313～41 年）の幕営を訪問している。ウズ・ベクのヴォルガ下流域と北カフカースを結ぶ東西移動に注目する諸研究は、彼の幕営が位置していたマージアルを夏営地あるいは冬営地と捉えてこの〈移動〉を恒常的なものと考えている。本稿では、ジョチ・ウルス初期のハンたちによるヴォルガ下流域の南北移動とウズ・ベクによる東西移動をつなぐことを試みる。

実のところマージアルは、カルピニ、ルブルク、マルコ・ポーロといったジョチ・ウルス初期の君主たちの〈移動〉について貴重な記述を残す外来者たちによって言及されることはない。この当時のカフカースはレズギ人ら山岳民がモンゴルに対して抵抗しており、安全の保障される、ましてや君主の季節移動の拠点となるような場所ではなかった。しかし、モンケ・テムル期（1266/67～82 年頃）以降の地政学上の転換は、ジョチ・ウルスにとってのカフカースの意味を大きく変えていく。13 世紀中葉以降の黒海交易の隆盛により、その拠点となった黒海北岸の諸都市とジョチ・ウルスの拠点であったヴォルガ下流域とを結ぶ交易路が活況を呈する。そして黒海岸の敵対勢力を打倒し、カフカースの山岳民の脅威をも除いたトクタの時代（1291～1312 年）以降、交易路——の少なくとも一部——は北カフカースを通過するようになる。こうした状況の変化のなかで興隆した都市の 1 つが、クマ川沿いのマージアルであった。さらに、アゾフからもデルベンド／鉄門からも等距離にあったこの地は戦略上の要衝でもあった。黒海北岸とカスピ海北岸とを統治下に置いたトクタは、クリミア半島のジェノヴァ港市カッファにも、フレグ・ウルスの冬営地アゼルバイジャンにも冬季に軍事遠征を行う。こうした軍事戦略において、北カフカースは、ヴォルガ下流域よりも遥かに機動性に富む場所であった。したがって、ジョチ・ウルス君主の北カフカースへの東西移動はおそらくは一過性のものではなく——ヴォルガ下流域の南北移動に並行しながらも——トクタの代に始まり、その後継者たちであるウズ・ベク、ジャーニー・ベク（治世 1342～57 年）といった後代の君主たちによって実践されていたものであった。これが本稿の主張となる。

1. 「帝国の巡行」と「移動牧畜」 —— 先行研究の整理と問題の所在 ——

モンゴルは元来遊牧民であった⁽⁴⁾。その〈移動〉のあらましをモンゴル帝国のイラン政権であるフレグ・ウルス(1256～1357年)について研究した本田實信の記述に沿って述べると、遊牧民の〈移動〉のリズムは季節とともにあった。通常は春に動き出し、家畜に草を食ませつつ渓谷をさかのぼって山腹や頂上部に至り、その地で夏を過ごす。秋になると山麓に降り、河川の下流域などの温暖な地で越冬する⁽⁵⁾。この季節のリズムに沿った循環運動は遊牧集団ごとに規定されており、各部族は各々夏の牧草地と冬の住地とを有し、一定の移動路を往来していく。遊牧民の夏の牧地は「夏営地／ヤイラク (yaylāq)」、冬の住地は「冬営地／キシラク (qishlāq)」と呼ばれ、これらの用語は13世紀にモンゴルが中央アジア・イランを征服したのちは、ペルシア語史料にも頻出するようになる⁽⁶⁾。13～14世紀に中央ユーラシアを統合したモンゴルは、故地であるモンゴル高原はもちろんのこと、中国・中央アジア・南ロシア・イランにおいても遊牧生活を維持し、君主は季節移動を続けた。大元ウルス(1260～1368年)の皇帝が大都を冬の都とし、上都に夏の宮殿を設けたことはマルコ・ポーロの語るところである⁽⁷⁾。また、チャガタイ・ウルス(1227～1340年頃)はイリ渓谷において⁽⁸⁾、ジョチ・ウルス(1240頃～1359年以降)はヴォルガ下流域において季節移動を行っ

- 4 遊牧については遊牧社会論を専門とする松原正毅の近著が参照できる。松原はモンゴル帝国について、それが遊牧勢力を主体とする政治体制のひとつのクライマックスを示すものとする一方、ユーラシアの多地域を版図とした世界規模の政治体制としては当然のこととして、その統治の多元性や構成員の多様性にも言及している。松原正毅『遊牧の人類史：構造とその起源』岩波書店、2021年、238-241頁。
- 5 ただし遊牧移動が必ずしも、冬＝低地、夏＝高地のパターンに留まるものでないことは、特にモンゴル高原の例として後述の吉田順一の研究が言及するところである。吉田順一『モンゴルの歴史と社会』風間書房、2019年、332-335頁。
- 6 ペルシア語文献における「ヤイラク／キシラク」の用法・用例については、テュルク学者のゲルハルト・デルファーの総覧を参照されたい。Gerhard Doerfer, *Türkische und mongolische Elemente im Neupersischen: unter besonderer Berücksichtigung älterer neupersischer Geschichtsquellen, vor allem der Mongolen- und Timuridenzeit* (Wiesbaden: F. Steiner, 1963-75), vol. 3, pp. 479-481; vol. 4, pp. 252-253.
- 7 マルコ・ポーロ、ルスティケッロ・ダ・ビーサ(高田英樹訳)『世界の記：「東方見聞録」対校訳』名古屋大学出版会、2013年、164、191頁。モンゴル帝国史家の杉山正明は、軍事力をほとんど唯一の存在基盤とする遊牧政権が、その政治支配力の根源を失うことなく農耕地域に進出してくにを維持する場合の条件として、官僚・行政機構や物流の中核組織といった〈政治装置〉を収容する拠点都市と、軍事支配を支える遊牧軍団を収容する大遊牧地とを、ある程度の近距離——250～350キロメートルほど——のうちに兼ねもつことを挙げ、上都・大都間は中華地域全体のなかで図抜けた好条件を備えていたとする。杉山正明『モンゴル帝国と大元ウルス』京都大学学術出版会、2004年、136頁(初出：杉山正明「クビライと大都」梅原都(編)『中国近世の都市と文化』京都大学人文科学研究所、1984年、485-518頁)。この上都・大都間の350キロメートルにおよぶ長楕円形の移動圏を「首都圏」と表現することの先駆性もまた杉山に帰せられる。杉山正明『クビライの挑戦：モンゴルによる世界史の大転回』講談社、2010年(初版(副題は「モンゴル海上帝国への道」)：朝日新聞社、1995年)、154頁。
- 8 チャガタイ・ウルス君主たちの〈移動〉についてはミハル・ピランの専論がある。Michal Biran, "Rulers and City Life in Mongol Central Asia (1220-1370)," in David Durand-Guédy, ed., *Turko-*

ていた⁽⁹⁾。

そして本田は、フレグ・ウルス君主の〈移動〉についての分析の結論として、フレグ・ウルスの夏営地は川の上源地にあり、冬営地が下流域に設けられていたこと、夏営地と冬営地との往復に関して、その移動路は概ね固定されていたことを指摘する。軍事その他、特別の場合を除いて、即位式・クリルタイ・裁判・官吏任命・使節謁見・閱兵・財務といった国事行為に関する事柄はほとんど冬・夏営地——あるいはその移動路——において行われていた。このように冬・夏営地の移動路内にほぼ限定される君主の行動範囲は、バグダードを別にすれば、アラタグ（夏営地）、アッラーン＝カラバグ（冬営地）、スルターニーヤ（夏営地）、スィヤー・クーフ（夏営地）⁽¹⁰⁾ とが囲む範囲で表現しうる【図 1】。此処こそがフレグ・ウルスの遊牧地（*yūrt*）であり、此処において税糧・情報が集められ、財庫が設けられ、基幹の軍が駐在し、ハンの命令が発せられた。本田は、これをフレグ・ウルスの「腹裏の地（*qol-un ulus*）」と呼ぶ⁽¹¹⁾。

その後、モンゴル学者の吉田順一は先の本田の論文にも言及しつつ、モンゴル帝国期にモンゴル君主が行っていた〈移動〉について分析を試みる。吉田は、モンゴル高原における遊牧の類型やフレグ・ウルスやジョチ・ウルスの事例も勘案しながら、オゴデイ（治世 1229～41 年）やモンケ（治世 1251～59 年）、クビライ（治世 1260～94 年）といったモンゴル帝国の君主たちの〈移動〉が、単に冬営地と夏営地だけでなく、春営地や秋営地をもめぐる形で〈移動〉であったことを明らかにした。ただし後二者に関しては、滞在期間も前二者に比べて短く、その存在が曖昧であったために、あまり記述されなかったとされる。一方でこれは後段での議論に関わってくるが、近現代におけるモンゴルの遊牧との比較に重点が置かれていることもあり、吉田は先の三君主の〈移動〉がモンゴルの一般的な遊牧のそれに近似していることを指摘している⁽¹²⁾。

さらに、フレグ・ウルス史家のチャールズ・メルヴィルはフレグ・ウルスの〈移動〉について、第 8 代君主オルジェイト（治世 1304～16 年）の治世を、軍事遠征がほとんどなく、かつ史料も通時代的に残っており、〈移動〉の王権としてイランのモンゴル統治を見る格好の事

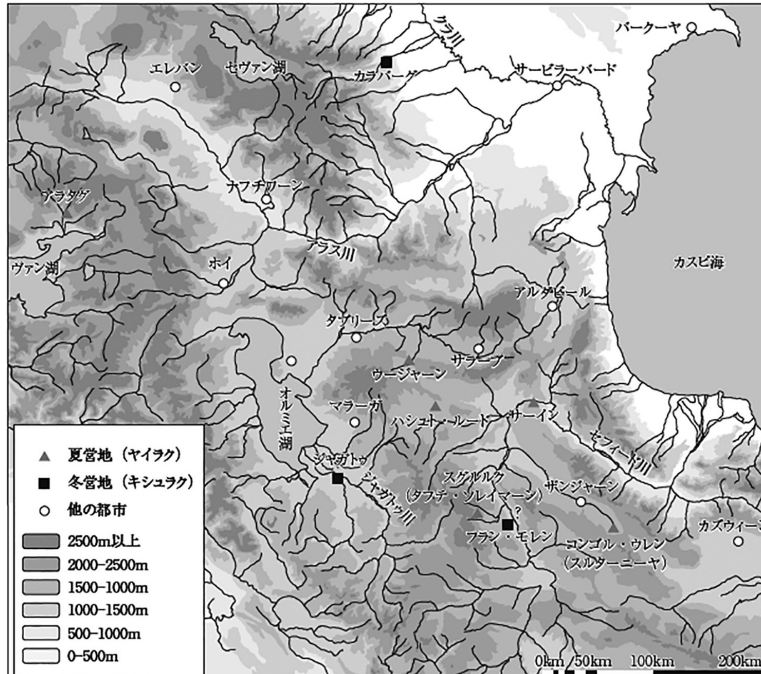
Mongol Rulers, Cities and City Life (Leiden: Brill, 2013), pp. 257–283. さらにチャガタイ・ウルスを後継したティムール（治世 1370～1405 年）の〈移動〉と彼による「首都圏」の形成に関しては、ティムール朝史家の川口琢司が論じている。川口琢司「ティムールの冬営地と帝国統治・首都圏」『史学雑誌』122 巻 10 号、2013 年、1–38 頁）。

9 本田實信『モンゴル時代史研究』東京大学出版会、1991 年、357–358 頁（初出：本田實信「イルハンの冬営地・夏営地」『東洋史研究』34 巻 4 号、1976 年、563–590 頁）。

10 スィヤー・クーフに関しては、本田が指摘するようにその位置を定めがたいものの、フレグ・ウルス第 9 代アブー・サイードの時代（1317～35 年）に活躍したハムド＝アッラー・ムスタウフィー（1281～1344 年頃）はペルシア語宇宙誌『心魂の歓喜（*Nuzhat al-qulūb*）』（1339/40 年編）のなかで、それをジャガトウ川の水源としている。Hamud-Allāh al-Mustawfī al-Qazwīnī, *Kitāb-i Nuzhat al-qulūb: al-maqālat al-thālitha dar shifāt-i buldān wa wilāyāt wa biqā'*, ed. Guy Le Strange (London: Luzac & Co., 1915), p. 223; 本田『モンゴル時代史研究』364 頁。

11 本田『モンゴル時代史研究』358–379 頁。

12 吉田『モンゴルの歴史と社会』321–346 頁（初出：吉田順一「モンゴル帝国時代におけるモンゴル人の季節移動：現代の季節移動とモンゴル帝国時代の季節移動」護雅夫（編）『内陸アジア・西アジアの社会と文化』山川出版社、1983 年、233–253 頁）。



【図1 フレグ・ウルス君主の冬・夏営地】

(Tomoko Masuya, "Seasonal Capitals with Permanent Buildings in the Mongol Empire," in Durand-Guédry, *Turko-Mongol Rulers, Cities and City Life*, p. 249 を基に作成。)

例として検討の対象とし、オルジェイトの〈移動〉の「地理年表 (geochronology)」を作成した。メルヴィルはオルジェイトの〈移動〉のパターンをその治世の時期に応じて3つに分類する。第1期(1304～1309年)と第3期(1313/14～16年)の「腹裏の地」アゼルバイジャン内での〈移動〉とは異なり、第2期(1309/10年～1313/14年)においてオルジェイトは冬営地をバグダード西方のムハッワルへと移す。メルヴィルはこのシフトの所以を、彼のシーア派への改宗に帰している。このように君主の〈移動〉は時として宗教的な要素も含むものである。概してオルジェイトの移動圏はテュルク・モンゴル系遊牧民の集住地帯と重なっており、そのことは移動が——1箇所に住定しては維持できなかったかもしれない——遊牧民たちの臣従を維持するためのものであったことを窺わせる。その一方、イラン南部に関してオルジェイトは、ファールスやキルマーンといった重要諸州を直接統治下に置きはしたものの、それらを訪れることはほとんどなかった。君主の〈移動〉には商税や都市税の回収といった経済的な動機もあったものの、それはあくまで「牧畜経済 (pastoral economy)」の範囲内であり——同時期の西ヨーロッパの〈移動〉の王権とは異なり——農業経済はその域外にあったとメルヴィルは結論づけている⁽¹³⁾。

こうした議論の成果を踏まえつつ、モンゴル学者のクリストファー・アトウッドは主としてモンゴル高原における君主の〈移動〉についての分析のなかで、前二者の議論を揚棄する

13 Charles Melville, "The Itineraries of Sultan Öljeitü, 1304-16," *Iran: Journal of the British Institute of Persian Studies* 28, no. 1 (1990): pp. 55-70.

形で、「帝国の巡行 (imperial itinerance)」が「移動牧畜 (mobile pastoralism)」とは性質を異にするものであることを主張する。アトウッドは「帝国の巡行」がもちろん「移動牧畜」と密接な関係を有しつつも、前者とは後者の観点からは時として非効率に見える行為のなかで権力の集中を図るものであったと論じている。オゴデイの〈移動〉パターンを精査したアトウッドは、その巡行が、春営地と秋営地の〈移動〉も考慮したときに、牧畜の観点から言えば営地への滞在が長すぎることを指摘する。さらにオゴデイはその〈移動〉の経路に定住民の居住地を作り、駅伝制を整備した上で外部からの物資輸送を実行していた。彼は「牧畜経済」にのみ依拠していたわけではなかったのである。さらに、軍の強化や財の再分配の意味合いも有していた狩猟や、チンギスのかつての大オールドへの参詣といった要素が加わることで、「帝国の巡行」はより多面化していく⁽¹⁴⁾。

さらにセルジューク朝(1038～1194年)を専門とするダヴィド・デュラン＝ゲディもまた、特に「セルジューク朝イラク政権 (Saljuqs iraqiens)」を扱う論考のなかで、「遊牧 (nomadisme pastoral)」と「政治的巡行 (itinérance politique)」とを異なるものとみている。セルジューク朝イラク政権の諸王のなかでも特に〈移動〉についての情報が多く見られるのが、マスウッド・ブン・ムハンマド(治世 1134～52年)であった。デュラン＝ゲディはこの君主の「地理年表」を作成する。そこから、この王がバグダード・ハマダーン間の移動を主要路としながら、副次的にハマダーンからサーフ、さらにはアゼルバイジャンへと移動していたことが明らかになる。彼らの〈移動〉は遊牧とは異なるとデュラン＝ゲディは主張している。「遊牧」は季節のリズムに沿って明確な暦を有するが、「政治的巡行」はそうではない。政治状況が要請すれば、彼らは冬の最中にでもバグダードからハマダーンへと急行している。逆に、夏の間中メソポタミアに滞在することもあった。夏営地・冬営地からの出発の時期も固定されたものではなかったのである⁽¹⁵⁾。

こうした先行諸研究から学ぶところは実に多い。アトウッドが示すように、モンゴル帝国期の君主の〈移動〉は少なくとも移動牧畜の季節のリズム以上の政治性を有するものであった。さらに、メルヴィルやデュラン＝ゲディが示すのは、その〈移動〉の可変性と重層性である。君主の〈移動〉は政治的な情勢等々を反映してその経路を変化させ、またどの経路をとるかにしてもその頻度にグラデーションが存在していた⁽¹⁶⁾。

こうした諸前提の基で我々は本稿の主題であるジョチ・ウルス君主の〈移動〉へと立ち返ることになる。モンゴル帝国君主の〈移動〉の可変性や重層性を語る先行諸研究は、しかし1つの例外もなく、ジョチ・ウルス君主たちの〈移動〉に関しては、それをヴォルガ下流域の南北移動に固定している。ジョチ・ウルスの君主たちは、ヴォルガ下流域の片道 600 キ

14 Christopher Atwood, "Imperial Itinerance and Mobile Pastoralism: The State and Mobility in Medieval Inner Asia," *Inner Asia* 17, no. 2 (2015): pp. 293–349.

15 David Durand-Guédy, "L'itinérance politique dans l'Iran turco-mongol (XIe–XIVe siècle)," in Sylvain Destephen, Josiane Barbier and François Chausson, eds., *Le gouvernement en déplacement: Pouvoir et mobilité de l'Antiquité à nos jours* (Rennes: PUR, 2019), pp. 269–290.

16 デュラン＝ゲディは〈移動〉の重層性を——中世ドイツの移動宮廷についての研究からの用語借用によって——領内を「中核圏 (zones centrales)」と「通過圏 (zones de transit)」および「遠隔圏 (zones éloignées)」という異なる3つの域圏に分かつことで表現している。Durand-Guédy, "L'itinérance politique dans l'Iran turco-mongol (XIe–XIVe siècle)," pp. 285–287.

ロメートルほどの範囲を季節移動しており、そのペースは非常にゆっくりとしたもので、おそらくは2～3日おきの移動が繰り返されていた。1日の移動距離は8キロから20キロほどであり、往復それぞれに5から7カ月を要した。このように語るファヴロの記述は、典拠となった史料も含めて先行諸研究と共通している⁽¹⁷⁾。

ではジョチ・ウルスの〈移動〉は、統一帝国の時代やフレグ・ウルス、またはセルジューク朝の諸君主の事例とは異なり、これまで語られてきたような固定的なものであったのだろうか。これが本稿の問いである。問題の前提として、上述の先行諸研究の議論はバトや彼を實質的に後継したベルケといった初期の君主たちについてのものに限られている。そしてそれは史料上の限界によるものであった。次節においては考察の前提として、ジョチ・ウルス初期の君主たちの南北移動とそれについての史料について見ていきたい。

2. ジョチ・ウルス初期の君主たちの南北移動 —— これまでに扱われてきた史料 ——

前節において、ジョチ・ウルス君主たちの〈移動〉の分析はバトやベルケといった初期のハンたちの〈移動〉に集中していることを述べた。それは主として史料上の限界がもたらす制限であるが、今節ではどのような記述が分析に用いられてきたのかを見ていきたい。そもそもこれはこの問題に限らず広くジョチ・ウルス史一般に言えることであるが、この時期のジョチ・ウルスの状況について、大元ウルスやフレグ・ウルスとは異なり、宮廷年代記などその状況を内側から伝えてくれる史料は存在しない。したがってジョチ・ウルス史の叙述に関しては、主としてフレグ・ウルスのペルシア語史料群や、シリア・エジプトを支配したマムルーク朝のアラビア語史料群、さらにはロシア正教会の手になるロシア語史料群が用いられるわけであるが、ことハンの〈移動〉に関してそれらが伝えてくれることはほとんどない。一方で、このウルスに外側から入った使節や旅行者たちの記述は断片的ながらもこの問題について貴重な証言を残している。夏営地に関しては、新都市ウケクについて、ジョチ・ウルス史家ユライ・シャミログルの専論がある。今節では基本的にはそれに沿って初期君主たちの〈移動〉を見ていくことにしたい⁽¹⁸⁾。

まずは1246年から翌年にかけてモンゴリアに滞在し、モンゴル帝国の第3代大ハンとなったゲユク(治世1246～48年)の即位式にも列席したフランチェスコ修道会のイオハンネス・デ・プラノ・カルピニはその報告記『モンガル人の歴史(*Ystoria mongalorum*)』のなかで、ジョチ・ウルスの遊牧季節移動について以下のような記述を残している。

我々はコマン(＝キプチャク)人の土地をすっかり通った。そこは全て平坦で、4つの大河がある。第1はネベル(＝ドニエプル)と呼ばれ、そのロシア側はコレンザが、反対側の平野にはマウキ(＝

17 Favereau, *The Horde*, pp. 126–127; 吉田『モンゴルの歴史と社会』324–325頁; Atwood, “Imperial Itinerance and Mobile Pastoralism,” pp. 302–303; 諫早『ユーラシア史のなかのモンゴル帝国』。

18 Uli Schamiloglu, “The Rise of Urban Centers in the Golden Horde and the City of Ükek,” *Golden Horde Review* 6, no. 1 (2018): pp. 18–40.

モチ・イエイエ)⁽¹⁹⁾が遊牧している。彼はコレンザより上位にある。第2はドンで、そのほとりをパティ(=バト)の姉妹を妻に持つカルボン(=スカカタイ)という君主が遊牧している。第3はヴォルガ、この河は巨大でそれにそってパティが移動している。第4はイエアク(=ウラル)と呼ばれ、2人の千人長が、1人は川の一方の側をもう1人はもう一方の側を往き来している。彼らは皆冬には海の方に下り、夏にはこれらの川の岸に沿って山に上る⁽²⁰⁾。

このようにカルピニはジョチ・ウルスの遊牧諸集団が川に沿って季節移動していた事実を伝える【図2】。さらに、シャミルオグルは、1253年に第4代モンケの宮廷を使節として訪れたフランチェスコ修道会のギョーム・ド・ルブルクの『旅行記(*Itinerarium*)』を引く。ジョチ・ウルス領内に入ったルブルクは、ヴォルガ河畔の「タルタル人がルテニア人とサラセン人を混住させて作った新たな居留地」⁽²¹⁾に至った。それが、シャミルオグルが論考の主題としている——現在のサラトフ付近にあたる——ヴォルガ川の渡河点の都市ウケクである。

マムルーク朝から半ば独立した都市ハマーの君主で、アラビア語地理書『諸国地誌(*Taqwīm al-buldān*)』(1321年頃編)を著わしたアブー・アル＝フィダーは、第7気候帯の諸都市についての章でこのウケクについて述べ、それが北緯49度55分、ヴォルガ川西岸に位置し、サライからもブルガールからも15日行程の距離にあったことを記している⁽²²⁾。ルブルクに拠れば、バトは夏に北上してきて8月までを涼しいこの地域で過ごし、その後ヴォルガ下流域へと南下する。実際彼がウケクに着いた7月から8月にかけて、バトの幕営はすでに南下を始めていた⁽²³⁾。カルピニとルブルクの記述を併せれば、バトはヴォルガ川に沿って夏営地ウケクと冬営地サライとの間を季節移動していたことが知られるのである⁽²⁴⁾。

さらにシャミルオグルは次代ベルケの季節移動について、ヴェネツィア商人マルコ・ポーロの『世界の記』を引く。マルコ・ポーロは父ニコロと叔父マテオとの最初の東方旅行において、1260年にコンスタンティノーブルへと至り、そこから黒海を横断してスーダクからジョチ・ウルス領内へと入った。彼らは「当時ボルガラ(=ブルガール)とサラ(=サラ

19 この人物の比定に関して、訳者の高田英樹はチャガタイの第2子モエトウケンとするが、彼はすでにチンギスによる中央アジア遠征の際にバーミヤーンで戦死している。高田英樹(編訳)『原典 中世ヨーロッパ東方記』名古屋大学出版会、2019年、91頁；Rashīd al-Dīn Faḍl-Allāh al-Hamadānī, *Jāmi‘ al-tawārīkh*, ed. Muḥammad Rawshan and Muṣṭafā Mūsawī (Tehran: Nashr-i Alburz, 1984), p. 752; Wheeler Thackston, *Rashīduddīn Fazlullāh’s Jami‘u’t-Tawārīkh: A History of the Mongols* (Cambridge: Harvard University, Dept. of Near Eastern Languages and Civilizations, 1998–99), p. 368)。マウキは通常、チャガタイの庶長子モチ・イエイエに比定されること、査読コメントより御教示を受けた。記して謝意を表する次第である。

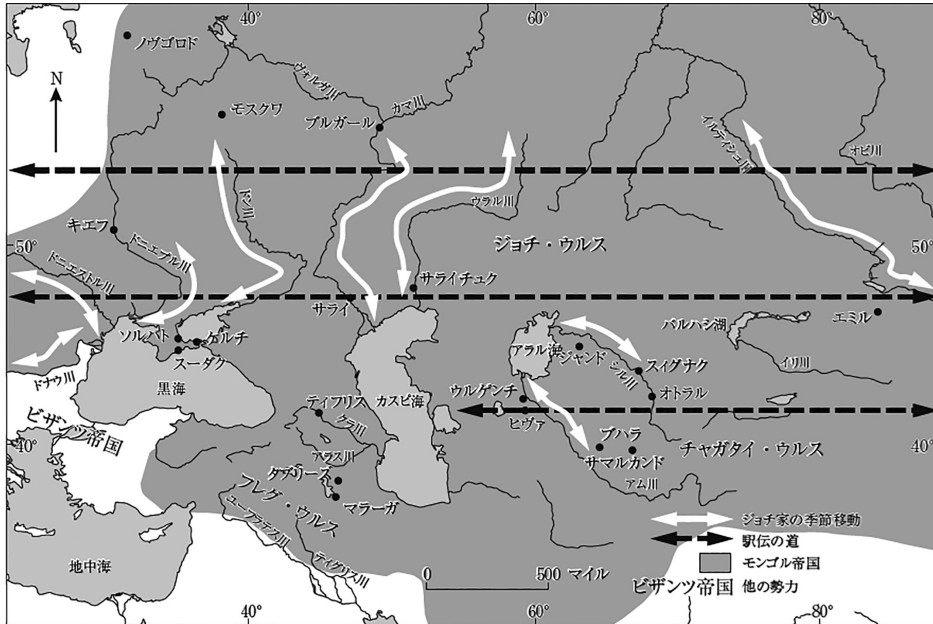
20 高田『原典 中世ヨーロッパ東方記』77頁。括弧内は——先の注で記した部分を除き——高田の比定に沿って追記したものである。

21 高田『原典 中世ヨーロッパ東方記』209頁。

22 Joseph-Toussaint Reinaud, *Géographie d’Aboulféda* (Paris: Impr. Nationale, 1840–48), vol.1 (text), pp. 216–217; vol. 2 (trans.), pp. 323–324; Schamiloglu, “The Rise of Urban Centers in the Golden Horde and the City of Ükek,” p. 25.

23 高田『原典 中世ヨーロッパ東方記』209頁。

24 Schamiloglu, “The Rise of Urban Centers in the Golden Horde and the City of Ükek,” pp. 26–27.



【図2 ジョチ・ウルスの川と海と季節移動（概念図）】

(Favereau, *The Horde*, p. 129 を基に作成)

イ) にいた」⁽²⁵⁾ ベルケの許を訪れ歓待されたことを伝える。この記述はベルケもまた、ヴォルガ川流域をサライから場合によっては遥か上流のブルガールまでを移動していたことを窺わせる。マルコ・ポーロ一行はその後ウケクでヴォルガ川を渡り、プハラへと至ることになる⁽²⁶⁾。

ウケクはヴォルガ川の渡河点としてこの時期発展した都市であるが、ファヴロはモンゴルが——彼ら自身はその技術で地点を選ばずに渡河することができた——渡河点を固定することで通行人たちの〈移動〉をコントロールしていたことを伝えている⁽²⁷⁾。これに限らず、川はジョチ・ウルスの〈移動〉にとって極めて重要な要素であった。ファヴロは川が夏も冬も「草原のハイウェイ (highways through the steppe)」⁽²⁸⁾ として機能したことを伝える。ルブルクによれば、夏は船でウケクよりも南から5日行程で北方のブルガールまで至ることができ

25 マルコ・ポーロ『世界の記』8頁。括弧内は訳者の比定に沿って追記したものである。

26 マムルーク朝君主ナーシル・ムハンマド（治世 1293～94、1299～1309、10～41年）に仕えたウマリーは、ジョチ・ウルスの君主たちが冬はサライ、夏はアルク・タグ（Arq Tagh）なる山脈で過ごしており、その広さは中国から太平洋までであるとしている。Klaus Lech, ed. and trans., *Das mongolische Weltreich: al-'Umarī's Darstellung der mongolischen Reiche in seinem Werk, Masālik al-abṣār fī mamālik al-amṣār: mit Paraphrase und Kommentar* (Wiesbaden: O. Harrassowitz, 1968), text, p. 83; trans., p. 147. シャミルオグルはこれをウラル山脈に比定している。Schamiloglu, “The Rise of Urban Centers in the Golden Horde and the City of Ükek,” p. 20 n. 3.

27 Favereau, *The Horde*, pp. 126–127.

28 Favereau, *The Horde*, p. 125.

た⁽²⁹⁾。さらに冬は河川が凍ることで、ドニエプル川・ドン川・ヴォルガ川の下流域が結ばれ、長距離の東西移動が可能となるのである⁽³⁰⁾。

先行諸研究が依拠したジョチ・ウルス君主たちの季節移動に関わる直接の記述は、これがほぼ全てである。こうしたカルピニやルブルク、マルコ・ポーロといった外来者たちの記述によって、バトやベルケといった初期のジョチ家の君主たちがヴォルガ下流域のサライを冬営地として、夏は北上してウケク、あるいはブルガールまでも至っていた可能性があることが分かる。これが西方からの外来者たちの紀行文と、アブー・アル＝フィダーやウマリーらの地誌を組み合わせ得られる内容の全てであり、ベルケの後の君主たちの〈移動〉についてはほとんど語られるところがない。

しかし、それ以降の君主の〈移動〉についても、それについてヒントを与えてくれる記述が存在する。しかもそれは今節で扱った南北移動とは性質の異なる東西移動であった。次節でこの東西移動について見ていきたい。

3. ウズ・ベクの東西移動

—— イブン・バットゥータと新都市マージアル ——

ベルケの後のジョチ・ウルス君主たちの〈移動〉について貴重な情報を与えてくれるのは、14世紀にアフロ・ユーラシアを横断したムスリム旅行家イブン・バットゥータである。彼はビザンツ帝国（330～1453年）の東部国境にあたるアナトリアに台頭したテュルクマーン系諸侯国を歴訪したのち、黒海沿岸の港町スィノプから船に乗り、クリミア半島の東端にあるアゾフ海への出入り口にあたる港市カルシュ（ケルチュ）の近くで下船した⁽³¹⁾。彼はカルシュからカファ（カフ）やキラム、アザーク（アゾフ）といったクリミア半島の諸都市を通り、その後は内陸の街道に沿って北カフカースの都市マージアルへと至る⁽³²⁾。この都市をイブン・バットゥータは「トルコの諸都市の中でも一番壮麗で規模の大きな町であり、大河の畔に位置し、幾つもの果樹園があって果物類も豊富にある」⁽³³⁾と描いている。イブン・バットゥータはその後に町を出て、そこから4日行程で「5つの山」を意味するビシュ・ダグへと向かった。その地に時のジョチ・ウルス君主ウズ・ベクのオールドがあると聞かされたからである。イブン・バットゥータはビシュ・ダグへの到着をラマダーン月の第1日のことだとしている——しかし、ウズ・ベクはすでにオールドをマージアル付近に移動させていた。この「ラマダーン [月] の第1日」⁽³⁴⁾をヒジュラ暦何年のことにするかについては議論

29 高田『原典 中世ヨーロッパ東方記』209頁。

30 高田『原典 中世ヨーロッパ東方記』77、280–281頁；Favereau, *The Horde*, p. 107.

31 イブン・バットゥータ、イブン・ジュザイ（編）、家島彦一（訳）『大旅行記』平凡社、1996–2002年、3巻、261–336頁；4巻、14–15頁；家島彦一『イブン・バットゥータと境域への旅：『大旅行記』をめぐる新研究』名古屋大学出版会、2017年、292頁。

32 家島『イブン・バットゥータと境域への旅』293頁。

33 Charles Defrémery and Beniamino Raffaello Sanguinetti, ed. and trans., *Voyages d'Ibn Batoutah* (Paris: Imprimerie nationale, 1853–58), vol. 2, p. 375；イブン・バットゥータ『大旅行記』4巻、29頁。

34 Defrémery and Sanguinetti, *Voyages d'Ibn Batoutah*, vol. 2, p. 380；イブン・バットゥータ『大旅行記』4巻、33頁。

のあるところであり、734 年（西暦 1334 年 5 月 6 日）⁽³⁵⁾ から、733 年（西暦 1333 年 5 月 16 日）、そして 732 年（西暦 1332 年 5 月 27 日）までの 3 つの可能性をここでは提示しておきたい⁽³⁶⁾。いずれの年代を取るにせよ、この時期は冬営地から夏営地への〈移動〉の時期にあたっている。ウズ・ベクはバトやベルケとは異なり、冬営地であるサライからヴォルガ川を北上せず、西進してカフカースへと入っているのである。これはジョチ・ウルス後代の君主の〈移動〉の様相を垣間見ることのできる貴重な記述であるといえる。この記述はいかに解釈すべきなのであろうか。

まずはこの〈移動〉が一過性のものなのかどうかである。先に紹介した研究でメルヴィルは、オルジェイトの治世にフォーカスした理由の 1 つを、これが軍事遠征の少ない安定した時代で恒常的な〈移動〉を見るに適していることに帰していた。この期間のウズ・ベクのカフカースへの西進は軍事遠征のような〈非常時〉のものであった可能性はあるのであろうか。史料に見る限り、ウズ・ベクによるカフカースを通過しての軍事遠征は、フレグ・ウルスに対する 2 度のアゼルバイジャン遠征である。後段で詳述するように、その時期はヒジュラ暦 718 年つまり西暦 1318 年から 19 年にかけての冬と、ヒジュラ暦 736 年つまり西暦 1335 年から 36 年にかけての冬であった⁽³⁷⁾。

ウズ・ベクのアゼルバイジャン遠征（1318～19 年冬および 1335～36 年冬）の履歴を見れば、イブン・バットウータによる訪問が、1332、33、34 年 5 月のいずれであっても、それとは合致せず、少なくとも軍事行動の最中の〈移動〉であった可能性は低い。また、イブン・バットウータが以下のように伝えるウズ・ベクのオルドの様子は、まさに先述のルブルクがバトの季節移動について語るものに酷似しているのである⁽³⁸⁾。

彼らが「オルド」と呼んでいる行営〔の隊列〕が近づいてきた。われわれには、それがまるで住民ご

35 「西暦」はすべてユリウス暦換算である。

36 イブン・バットウータ『大旅行記』4 巻、105 頁注 92。この注において家島は 734 年としているが、後述のように後に 733 年に改めている。

37 加えてヴィルギル・チオチルタンの研究に拠れば、ウズ・ベクの親征ではないものの、1322 年 8 月と 1323 年 1 月とにクリミア半島のスーダクに軍を派遣していることが知られる。Virgil Ciociltan, *The Mongols and the Black Sea Trade in the Thirteenth and Fourteenth Centuries*, trans. Samuel Willcocks (Leiden: Brill, 2012), p. 193. これに関わることとして、ファヴロはこの 2 つのアゼルバイジャン遠征に挟まれた期間において、ウズ・ベクはフレグ・ウルスに対して融和政策を展開したとするが、それにはいくぶんの留保が必要であると思われる。Favereau, *The Horde*, p. 231. 例えば、ムスタウフィーのペルシア語史書『選史 (*Tārīkh-i guzīda*)』(1329/30 年編)は、ヒジュラ暦 725 年（西暦 1324/25 年）のこととして、フレグ・ウルスのチョパン（1327 年没）が第 1 次遠征の報復のためにジョチ・ウルス領に遠征したことを伝える。Hamud-Allāh al-Mustawfī al-Qazwīnī, *Tārīkh-i guzīda*, ed. 'Abd al-Husayn Nawā'ī (Tehran: Mu'assasayī Intishārāt-i Amīr Kabīr, 1960), pp. 616–617. さらに、アブー・バクル・アル＝アハリーの『シャイフ・ウワイズ史 (*Tawārīkh-i Shaykh Uwāys*)』(1360 年頃)は、先のチョパンの報復を第 1 次遠征の翌年にあたるヒジュラ暦 719 年（西暦 1319/1320 年）のこととし、彼のテレク河畔までの進軍と、ウズ・ベクの撤退を伝えている。Abū Bakr Quṭbī Aharī, *Tawārīkh-i Shaykh Uwāys*, ed. Īraj Afshār (Tabriz: Intishārāt-i Sutūda, 2010), p. 210. これら 2 つの遠征の間にも両ウルス間に軍事衝突はあったのである。

38 高田『原典 中世ヨーロッパ東方記』209、212 頁。

と移動する大規模な町のように見えた。つまりその中には幾つものモスクがあり、市場もあり、しかも彼らは馬と一緒にアラバを牽き移動している状態で煮炊きするので、炊煙が天空に立ち昇る。彼らは野営地に着くと、アラバから天幕を下ろして地上に置いた。つまり天幕は軽くて運び易いので、モスクや店舗も同じように扱うのである⁽³⁹⁾。

ここまでの議論を基に、ジョチ・ウルス後代のハンたちがヴォルガ下流のみならず、北カフカースの具体的にはマージアル付近の地を〈移動〉の経路としていたという仮説を立てたい。イブン・バットゥータの記述とウズ・ベクの軍事行動の履歴から、ウズ・ベクがその治世において少なくとも1度は、軍事行動ではなく、おそらくは季節移動の形で、カフカースはマージアル付近に逗留していたことが知られた。しかし、先の仮説と実証までの間にはまだ相当な距離がある。このカフカースへの季節移動は果たして恒常的なものであったのだろうか。仮にそれが恒常的なものだったとして、それが恒常的なものとなったのはいつからなのだろうか。仮説を実証するためには以上のような問いに解が与えられる必要がある。そしてこれらの2つの問いに対して重要なのが、マージアルである。この都市は13世紀の終わりがごろから繁栄を見せたジョチ・ウルスの新都市であった。そしてその繁栄のきっかけは、13世紀後半におけるこの地の地政学上の転換だったと考えられるのである。以下、そのことについて検証していきたい。

マージアルは、イブン・バットゥータ『大旅行記』の訳注を完成させた家島彦一が注記しているように、カスピ海に流れ込むクマ川中流域に位置する都市であり、その場所は現在のブジョンノフスク (Budennovsk) 付近にあたると思われる⁽⁴⁰⁾。この都市は北緯44度47分、東経44度10分に位置し、州都スタヴロポリから南東約220kmの距離にある⁽⁴¹⁾。この都市自体は標高135mほどであるが、ウズ・ベクはそこからさらにクマ川を遡り、ビシュ・ダグ——現在のピャチゴルスク (Piatigorsk) にあたる⁽⁴²⁾——まで徐々に高度を上げている。

先の段でこの都市は「ジョチ・ウルスの新都市であった」と述べたが、その所以として、先の節でジョチ・ウルス初期のハンたちの〈移動〉を紹介するなかで挙げた、カルビニ（往路1246年4月、復路1247年5月）、ルブルク（往路1253年7～8月、復路1254年10～11月）、マルコ・ポーロ（1261年）といった13世紀に黒海北岸からカスピ海北岸を横断した人物のいずれもが——通過に際して——このマージアルに言及しないことが挙げられる。ルブルクはその往路に関してカフカースを通過せず、ドン川とヴォルガ川が近接するよ

39 Defrémery and Sanguinetti, *Voyages d'Ibn Batoutah*, vol. 2, p. 380 ; イブン・バットゥータ『大旅行記』4巻、33頁。「オールド」に関しては、本稿の表記に合わせて、家島訳の〈ウルドゥー〉より改変した。「アラバ」とはチュルク語で輪荷車（牛車）や脚輪付き台車を意味し、その上に天幕／オールドが積まれて、遊牧民の移動生活に重要な役割を果たした。イブン・バットゥータ『大旅行記』4巻、94頁注30。

40 家島はプリムムスク (Primumsk) としている（イブン・バットゥータ『大旅行記』4巻、102頁注74）。地名の比定に関しては、宮崎千穂氏の御助力を得た。記して謝意に代えさせて頂く。

41 ブジョンノフスクの地理情報に関してはロシア語版ウィキペディアを参照した。“Budennovsk,” *Wikipediia*.

42 家島はミネラーリヌイエ・ヴォードウィであった可能性にも言及している。イブン・バットゥータ『大旅行記』4巻、105頁注90。

り北方のステップ地帯を抜けている⁽⁴³⁾。マルコ・ポーロに関しても明言はないが、ルブルク同様にウケクを通過していることから、「草原の道」を直行したと思われる⁽⁴⁴⁾。マルコ・ポーロがこの地域を通過した時期は、フレグ・ウルスのフレグとジョチ・ウルスのベルケとの間に戦端が開かれる直前であり、戦場となるカフカースを通過する選択肢はおそらくなかった。一方のルブルクに関しては、後段の議論とも関わる興味深い記述が見られる。彼は先のようにドン川とヴォルガ川が近接するより北方のステップ地帯を抜けてきたことを語る直後の段で、カフカースについても言及している。

南方には非常に高い山「コーカサス」があり、その荒地の斜面にはケルキス「シルカシア人」とアラン人あるいはアアスが住んでいる。彼らはキリスト教徒で、目下タルタル人と戦っている。その向こうのエティリアの海あるいは湖の近くに、レスギと呼ばれるサラセン人がおり、やはり服していない。その向こうが鉄門「デルベンド」で、野蛮人がペルシスに入って来ぬようアレクサンデルが作ったもので、その位置については、帰りにそこを通ったので後でお話する。我々が通ったこの地のその2つの川の間には、タルタル人が占拠する前はコマン・キプチャクが住んでいた⁽⁴⁵⁾。

このように、ルブルクがユーラシア東西を横断した1250年代においては、カフカースには依然として山岳民が割拠してモンゴルに抵抗しており、とても季節移動の拠点となるような場所ではなかった。引用部にあるようにルブルクは復路においてカフカースを通過しているが、それはバトの息子サルタクの兵に守られながらの移動であった⁽⁴⁶⁾。

一方でこれも家島が注記しているように、マルコ・ポーロは『世界の記』の末尾において「西タルタル人の国」(＝ジョチ・ウルス)についての章を置き「このサイン王(＝バト)は、ロシエとコマニエとアラニエとラックとメンジャルとジックとグティアとガザリエを征服した」⁽⁴⁷⁾としている。この「メンジャル(Mengiar)」について、愛宕松男はそれが『元史』その他の漢籍における馬札児すなわちマジャールの国のことであると述べ、広義にはハンガリーを指すとしたうえで、「狭義では」としてクマ川流域の地を指すとするが⁽⁴⁸⁾、ここでの「メンジャル」はヘンリー・ユールが述べるように、おそらくは後者、イブン・バットウータが言及した都市マージャール、アブー・アル＝フィダーの言うところの「クム・マージャール(Kum-Mājar)」⁽⁴⁹⁾——その地には14世紀にはフランチェスコ会の修道院があった——であろう⁽⁵⁰⁾。後段の議論に関わるため、ここではアブー・アル＝フィダーの記述を引用しておき

43 高田『原典 中世ヨーロッパ東方記』200頁。

44 マルコ・ポーロ『世界の記』9頁。

45 高田『原典 中世ヨーロッパ東方記』200頁。注記は全て訳者の手になる。

46 高田『原典 中世ヨーロッパ東方記』281-282頁。

47 マルコ・ポーロ『世界の記』599頁。

48 マルコ・ポーロ、愛宕松男(訳注)『[完訳] 東方見聞録』平凡社、2000年(初版:1971年)、2巻、415頁注2;イブン・バットウータ『大旅行記』4巻、101頁注74。高田は、これを「マジャールの地、ハンガリー地方」としている。マルコ・ポーロ『世界の記』599頁注5。

49 家島は「クーウマージャール(Kūwmājar)」と表記する。イブン・バットウータ『大旅行記』4巻、101頁注74。

50 ただしユールも、「メンジャル」がマジャールである可能性にも言及している。Henry Yule, *The Book of Ser Marco Polo: The Venetian concerning the Kingdoms and Marvels of the East* (London:

たい。

クーン・マージアル (Kūm-Mājar) ——カーフにダンマ、ワーウにスクーン、シャッダ付きのミームに、アリフ、ジーム、点なしのラー。それはベルケ・タタールの国にある都市である。ほぼ鉄門とアゾフの中間にある。アゾフの東方、鉄門の西方にあるがそれらよりも南寄りにある。その地方の近くにはレズギ人がある。彼らは北方タタールつまりベルケ・タタールと、南方タタールつまりフレグ・タタールとを分かち山のなかに住む種族である。彼らの都市はラクズ——ラームにファタハ、カーフにスクーン、最後に点付きのザー——と呼ばれる。レズギ人の北にはカイトク人——カーフにファタハ、下2点にはスクーン、上2点にはファタハ、最後にはもう1度カーフ——がいる。カイトク人も山に住む種族であり、その山はレズギ人の北側に接している。彼らは街道を襲う山賊であり、彼らの山は鉄門を見下ろす位置にある⁽⁵¹⁾。

このようにクマ川の畔に位置したマージアルは、山岳の民であったレズギ人たちの拠点近くに位置する都市であった。イスラム教徒であった彼らが1250年代の時点ではモンゴルの支配に激しく抵抗していたことは、先のルブルクの記述に見たとおりである。

さらにマージアルについては発掘調査が進んでおり、ロシア考古学の成果を利用することができる。ヴィターリー・バベンコは、マージアルが都市として台頭してきた時期を、中国貨幣の出土時期に合わせて1250年代後半から60年代初頭にかけてと見る。さらに彼は、マージアル、クム・マージアル、サライ・マージアルと史料上様々な名称で出てくるこの都市に共通する「マージアル」が、都市の創設者にちなんだものであると考えている。ジョチ家の家系図からは、マージアルの名はシバン家、タンゲト家、シンクル家、チンバイ家その他に見出すことができる⁽⁵²⁾。そのなかでもバベンコは、フレグによって処刑され、彼とベルケとの全面対決の主因の1つとなったシバンの第4子バラガイに着目し、彼の弟のマージアルもカフカースにいたとみる⁽⁵³⁾。その後にはバラガイの息子タマ・トクタが「鉄門」デルバンドの守備を任されているが⁽⁵⁴⁾、マージアルもまた北カフカースを任されており、その拠点が「マージアル」であったと推察しているのである⁽⁵⁵⁾。

すでに第1節において、モンゴル帝国史研究の文脈から、ジョチ・ウルス君主たちの〈移動〉を論じるものはいずれも初期の君主たちの南北移動のみに焦点を当てていることを述べ

John Murray, 1903), vol. 2, pp. 491–492n1.

51 Reinaud, *Géographie d'Aboulféda*, vol.1 (text), p. 201; vol. 2 (trans.), pp. 283–284.

52 ジョチ家の家系図については、赤坂恒明の研究を参照できる。赤坂恒明『ジュチ裔諸政権史の研究』風間書房、2005年。

53 ただしバベンコは、ベルケのイラン侵入にバラガイも参加していたとしているが、上述のようにバラガイはすでに処刑されており、この見解は正しくない。Rashid al-Dīn, *Jāmi' al-tawārīkh*, p. 738; Thackston, *Rashīduddīn Fazlullāh's Jami' u't-Tawarikh*, p. 362.

54 Rashīd al-Dīn, *Jāmi' al-tawārīkh*, pp. 725, 745–746; Thackston, *Rashīduddīn Fazlullāh's Jami' u't-Tawarikh*, pp. 353, 364–365.

55 Vitalii Aleksandrovich Babenko, “O nekotorykh diskussionnykh problemakh istorii goroda Mazhara,” in Dmitrii Sergeevich Korobov, ed., *E.I. Krupnov i razvitie arkheologii Severnogo Kavkaza. XXVIII krupnovskie chteniia: Materialy mezhdunarodnoi nauchnoi konferentsii* (Moscow: Russian Academy of Sciences Institute of Archeology, 2014), pp. 316–318.

た。しかし、この新都市マージアルをめぐるのは、主としてロシア考古学の研究のなかに、この新都市をジョチ・ウルス君主たちの〈移動〉のなかで論じる研究が存在する。そしてそれらの研究は、マージアルが夏営地であったのか冬営地であったのかという点に関して見解が分かれる。以下、それぞれの説を概観し、その是非について検討していきたい。

考古学者のアレクセイ・ラクシンは、ヴォルガ下流域に位置する 13～15 世紀のものとされる墳墓 (*kurgan*) についての研究のなかで、マージアルは冬営地であったとする説を主張した。ラクシンは、ジョチ・ウルスが 11 から 12 のウルスに分かれていたとする。そのなかでサルタクのウルスとベルケのウルス、バトのウルスに加えて、ウラル川の右岸に位置していたウルスが検討される。ラクシンに拠れば、それらのウルスの特徴づけるのは家畜飼育に根差した「子午線に沿う」つまり南北移動であった。水の獲得や寒さからの逃避など、彼らの季節移動は極めて計画的で、決まったルートに沿うものであった。

そのなかでラクシンはベルケのウルスについて、墳墓の分布から、このウルスがカスピ海北岸のステップ地帯に展開していたとする。その南東部は「黒い土 (*khara gazar*)」の地と呼ばれ雪が降らないため、後代カルムイク人もこの地で冬営していた。それ以前、16 世紀のノガイ・オルダのなかでもカジ (1576 年没) に率いられた小ノガイがアゾフからアストラハンを季節移動していたことが知られ、その冬営地もまた「黒い砂 (*karakum*)」の地であった⁽⁵⁶⁾。そして今回の議論に重要な点としてラクシンは、このベルケ・ウルスの冬営に際して、その行政の中心地はおそらくマージアルであったと見ている。早春にはマヌィチ川とクマ川が氾濫し、水が引くと豊かな牧草地が現れる。冬営地マージアルから夏営地への移動はこのマヌィチ＝クマ間の窪地を通して行われ——近代カルムイク人の〈移動〉からの類推として——夏営地はその北西部にあたるエルゲニ高地であったとされる。それは涼と水とが同時に取れる夏営に最適な土地であり、イブン・アル＝アスィール (1160～1233 年) のアラビア語年代記『完史 (*al-Kāmil fī al-ta'rikh*)』(1231 年頃) もそれを称賛しているとする⁽⁵⁷⁾。おそらくは 13 世紀においても、ベルケ・ウルスの季節移動はカルムイクのそれと大差なかったとラクシンは見ているのである⁽⁵⁸⁾。

これと見解を異にし、より〈移動〉に注視しながらマージアルがむしろ夏営地だったとするのが、アレクサンドル・ユルチェンコである。マージアルを主題に開催された考古学学会

56 カジとその勢力である小ノガイについては、中央ユーラシアの叙事詩研究者である坂井弘紀の論考が参照できる。坂井弘紀「16 世紀のノガイ＝オルダ (2)：カラサイ、カジとアディルに焦点をあてて」『和光大学表現学部紀要』13 号、2013 年、52–70 頁。

57 Ibn al-Athīr; Bulat Eshmukhambetovich Kumekov and Ashirbek Kurbanovich Muminov, eds., *Istoriia Kazakhstana v arabiskikh istochnikakh*. Vol. 1. *Sbornik materialov, otносиashchikhsia k istorii Zolotoi Ordy: Izvlecheniia iz arabiskikh sochinenii, sobrannye V.G. Tizengauzenom* (Almati: Daik-Press, 2005), p. 462; Donald Sidney Richards, *The Chronicle of Ibn al-Athīr for the Crusading Period from al-Kāmil fī al-ta'rikh*. Vol. 3. *The Years 589–629/1193–1231: The Ayyūbids after Saladin and the Mongol Menace* (Farnham: Ashgate, 2008), p. 223. ただしこの記述は「キプチャクの地 (*bilād Qifjāq*)」一般についてのものであり、特にエルゲニ高地に言及したものではないことには注意が必要である。

58 Aleksei Ivanovich Rakushin, “Kochevyie ulusy Zolotoi Ordy (po materialam kurgannykh mogil'nikov Nizhnego Povolzh'ia 13–15 vv.),” *Arkheologiia vostochnoevropeiskoi stepi* 4 (2006): pp. 214–239.

の成果として編まれた論文集中に寄稿した論文のなかで彼は、ウズ・ベクの時代のマージアルを「首都」の1つとして描く。季節移動でハンたちが通過する「都市」の役割を、クリルタイと祝祭の開催地であるとユルチェンコは主張する。特に中国暦の年の真ん中に行われるクリルタイの開催地としての役割を、モンケ期のカラコルムも、ベルケ期のブルガールも果たしていたとするユルチェンコは、マージアルにもこの種の役割があったと見ているのである。彼に拠ればウズ・ベクの時代の冬の都はサライ、夏の都はマージアルであった。イブン・バットウータの記述に拠るユルチェンコはすでに議論したように、5月初めにウズ・ベクのオールドがマージアルから4日行程の北カフカースの地、ビシュ・ダグにあったことを確認する。そこからブルガールの地まで行ったイブン・バットウータは、ヒジュラ暦734年ラマダーン月28日（西暦1334年6月2日）にマージアルの地に戻る。それは断食月の終わる2日前であり、その翌日にはオールドで祝日が盛大に祝われた。帝国の慣習としてクリルタイと即位式は祝日（6月初頭）に重ねられたとユルチェンコは語る。例として彼は1304年6月中旬に執り行われたオルジェイトの即位式を挙げている。彼がマージアルを夏の都とするのは以上のような理由からである⁽⁵⁹⁾。

以上2者の議論から学ぶべきものは決して少なくないものの、結論から言えば、少なくともジョチ・ウルス後代の君主たちの〈移動〉に関して、その議論のいずれにも拠ることはできない。まずはこの地を冬営地と考えるラクシンの議論について、ラクシンの議論はあくまでベルケが皇子の時分のウルスを考えるものであった。当時はジョチ・ウルスの君主としてバトが健在であり、彼はヴォルガ下流域を〈移動〉していた。この時代においてはルブルクが述べるように、ベルケはカフカースをその幕営地としていたとされている。しかし、本稿で扱うのはあくまで君主の〈移動〉である。君主となったあとのベルケは、やはりマルコ・ポーロが述べるように、バトのごとく、ヴォルガ下流域を南北移動していたと思われる。ラクシンが典拠の1つとして挙げる『集史』の記述も、確かにベルケ軍を破ったフレグ軍がそのまま北上してベルケの幕営地を冬季に劫掠したことを伝えるが、その場所がマージアルであったと明言するものではない⁽⁶⁰⁾。むしろ君主となったあとのベルケにとって、マージアルは冬営地サライからは距離がありすぎ、冬営地とすべき場所とならなかったように思われる。

続いてこの地を夏営地とするユルチェンコの議論である。モンゴルが西方領域に侵入した後も中国暦を用いていたという議論は、モンゴルの〈移動〉のリズムを考えるうえでも非常に重要である。フレグ・ウルスも少なくともガザンの時代までは中国暦の年始を祝っていた⁽⁶¹⁾。しかし、当然のことながら政治状況に強く左右される即位式に関して、それが中国暦の年の真中にあたる6月初頭にあたるとは限らない。本田の研究がその時期をまとめている

59 Aleksandr Grigor'vich Iurchenko, "Madzhar kak odna iz ordynskikh stolits vremeni pravleniia khana Uzbeka," in Iurii Dmitrievich Obukhov, ed., *Materialy pervogo madzharskogo arkhologicheskogo foruma. Piatigorsk–Budennovsk–2012* (Kazan: Academy of Sciences of the Republic of Tatarstan. Institute of Archaeology named after A.Kh. Khalikov, 2016), pp. 57–73.

60 Rashīd al-Dīn, *Jāmi' al-tawārīkh*, p. 1046; Thackston, *Rashīduddīn Fazlullāh's Jami'u't-Tawarikh*, p. 512.

61 Rashīd al-Dīn, *Jāmi' al-tawārīkh*, p. 1309; Thackston, *Rashīduddīn Fazlullāh's Jami'u't-Tawarikh*, p. 654.

るように、6月の上旬に举行されたオルジェイトの即位式の時期は、歴代のフレグ・ウルスのハンたちの即位式の一覧のなかでは通例とは言い難い⁽⁶²⁾。次にクリルタイに関しては、夏季開催が確かに多いものの、これも本田がその時期をまとめているように中国暦の年の真中が常に意識されているようには思われない⁽⁶³⁾。

このようにラクシンにしるユルチェンコにしる、彼らの議論にそのまま依拠することはできない。ただしマージアルは冬営地なのか夏営地なのか、その観点でいえば、ことウズ・ベクの治世に関しては夏営地であった可能性の方が高い。しかし、この場合においても気候条件を勘案する必要がある。マージアルは先述のように標高135メートルほどであり、避暑に適した場所とは思われない。したがって、マージアルを夏営地と捉える場合にも、場所によっては標高が1400メートルほどある近隣のビシュ・ダグとの範囲のなかでより広域に考えるべきである。さらに言えば、むしろマージアルへの逗留については、冬営地か夏営地かという二分法で考える必要は必ずしもないと考える。マージアルが13世紀終盤以降、北カフカースの交易の中心都市となっていたことは疑いない。そしてこの事実をフレグ・ウルスにおける交易拠点であったタブリーズと君主たちの〈移動〉との関係と照らし合わせると興味深い。タブリーズはフレグ・ウルスの「腹裏の地」たるアゼルバイジャンの「国都 (*dār al-mulk*)」⁽⁶⁴⁾であり、歴代のハンたちもこの都市を非常に重視してきたものの、この都市はハンの〈移動〉において冬営地でも夏営地でもなく、重要な通過点であった。強いて言うならばそれは春営地や秋営地の類であったのである⁽⁶⁵⁾。そしてタブリーズは祝祭の開催地でもあった。フレグ・ウルスのペルシア語宮廷史書である『集史 (*Jāmi' al-tawārīkh*)』(1307年編)は、アルゲン(治世1284～91年)が治世晩年の1290年にタブリーズを訪れた折、その到着がちょうどラマダーン明け(10月6日)に近づく時期であったため、その地のムスリムたちを大いに慰撫したことを伝えている⁽⁶⁶⁾。祝祭の地は夏営地・冬営地に限られてはいなかった。

では仮に、マージアルが冬営地でも夏営地でもなく通過点であったのだとすれば、ウズ・ベクのオールドはマージアルを越え、どこまで至っていたのであろうか。これに関する問題として、マージアルへの〈移動〉に関して依拠したイブン・バットウータ『大旅行記』のクロノロジーの混乱について触れておきたい。イブン・バットウータはその『大旅行記』のなかでたびたび日付を記している。それに拠ればヒジュラ暦732年の巡礼大祭の日々(西暦1332年8月30日～9月5日)にメッカを出た彼は、733年のズー・アル=ヒジャ月の最後の日(西暦1333年9月11日)にインダス河畔へと到達する⁽⁶⁷⁾。キプチャク草原の旅はこの間に挟まれたものである。このクロノロジーを信用するとすれば、家島が述べるように、ビシュ・ダグについた「ラマダーン[月]の初日」とはヒジュラ暦733年(1333年5月16

62 本田『モンゴル時代史研究』370–371頁。

63 本田『モンゴル時代史研究』371–372頁。

64 Mustawfī, *Nuzhat al-qulūb*, p. 75.

65 これに関しては例えばメルヴィルの作成したオルジェイトの〈移動〉の「地理年表」を参照されたい。Melville, “The Itineraries of Sultan Öljeitü, 1304–16,” pp. 64–66.

66 Rashīd al-Dīn, *Jāmi' al-tawārīkh*, pp. 1178–1179; Thackston, *Rashīduddīn Fazlullāh's Jami'u't-Tawarikh*, p. 574; 諫早『ユーラシア史のなかのモンゴル帝国』。

67 イブン・バットウータ『大旅行記』4巻、418頁。

日) のことと見なすしかない⁽⁶⁸⁾。しかし、メッカからインダス河畔までわずか1年あまりの間でエジプトとシリアを経由してユーラシア大陸内部を縦断する旅程にはどう考えても無理がある⁽⁶⁹⁾。この問題に関して東洋学者のハミルトン・ギブは、別の史料からも記述の正しさを裏付けることのできるインダス河畔到着の日付を確実なものと考えたうえで、イブン・バットゥータのメッカ出発を2年遡らせてヒジュラ暦730年(1330年10月)のこととした修正年表を発表した。そこではビシュ・ダグへの到着はヒジュラ暦732年(1332年5月27日)のこととされている⁽⁷⁰⁾。

仮にギブのクロノロジーが正確なものだとすると、ある史料が興味深いものとして立ち現れてくる。それが、ウズ・ベクが1332年9月9日にヴェネツィアの商人たちに発給したとされるヤルリク／勅令である。その末尾には以下のようにある。「我はパイザと特権状とを朱印(アル・タムガ)付きで与えた。サル年の8月、[月が] 欠けはじめてから4日目、コバン川の赤い岸にいた時に、我は書いた(Dedimus balsa et priuilegium cum bullis rubeis in anno simie octaue lune, die quarto exeunte, justa fluuium Coban, apud ripamrubeam existentes, scripsimus)」。このヤルリクは先述のユルチェンコが言及しているものであり、彼はこのヤルリクを分析したアルカディ・グリゴリエフらの研究に拠って、「コバン川」をアゾフ海に注ぐコバン川に、「赤い岸」を同河川が黒海沿岸に形成する河口湾であるキズイル・タシュに比定している⁽⁷¹⁾。このクロノロジーに拠れば、この年の5月から6月にかけてマージアルにいたウズ・ベクのオールドは、その年の9月にはアゾフ沿岸にあったことになる。つまりウズ・ベクのオールドは北カフカースを横断しているのである。もちろんギブのクロノロジーは整合性を考慮した数字合わせともいえ、イブン・バットゥータのマージアル訪問からウズ・ベクのヤルリク発行への連結は必ずしも証拠立てられるものではない⁽⁷²⁾。しかし、ラクシンが語るように、16世紀には小ノガイがアストラハンからアゾフへの東西移動を行っていた事実が知られるうえ、ウズ・ベクの先代であるトクタもノガイとの抗争のさなか、ドン川沿いに夏営していたことを『集史』が伝えている⁽⁷³⁾。こうした状況証拠に鑑みれば、ウズ・ベクの北カフカース横断にはそれなりの根拠があると言える。

このように、今節までの議論で、ジョチ・ウルスの初期の君主たちがヴォルガ下流域に沿って南北移動していたこと、その一方でより後代のウズ・ベクは北カフカースを東西移動していた可能性が高いことが分かった。では、この南北移動と東西移動とは接続しうるものなの

68 家島『イブン・バットゥータと境域への旅』296-297頁。イブン・バットゥータの記述に基づく三大洲周遊のクロノロジーについては家島の年表を参照できる。(家島『イブン・バットゥータと境域への旅』xii-xiii頁。

69 イブン・バットゥータ『大旅行記』4巻、418-419頁。

70 イブン・バットゥータ『大旅行記』4巻、422頁。

71 Lurchenko, "Madzhar kak odna iz ordynskikh stolits vremeni pravleniia khana Uzbeka," p. 69; Arkadii Pavlovich Grigor'ev and Viktor Petrovich Grigop'ev, *Kolleksiia zolotoordynskikh dokumentov XIV veka iz Venetsii* (St. Petersburg: Istochnikovedcheskoe issledovanie, 2002), pp. 24, 26.

72 ギブの修正年表に対する批判に関しても、家島の解説を参照できる。イブン・バットゥータ『大旅行記』4巻、423-427頁。

73 Rashīd al-Dīn, *Jāmi' al-tawārīkh*, p. 745; Thackston, *Rashīduddīn Fazlullāh's Jami'u't-Tawarikh*, p. 364.

だろうか。これら南北移動と東西移動をつなぐ鍵が、先のウズ・ベクのヤルリクで言及したヴェネツィアと、そしてジェノヴァといった二大海洋国家 (thalassocracies) であり、13 世紀後半における北カフカースの地政学上の転換であった。次節ではそれについて議論していきたい。

4. 地政学上の転換

—— ジョチ・ウルスにおける〈移動〉のポリティクス ——

バトやベルケがヴォルガ川沿いを南北移動していた時代を経て、次代モンケ・テムルの治世には地政学上の転換期が訪れる。その主となる動力となったのが黒海をめぐるポリティクスであった。黒海北岸の諸港市は 1260 年代以降、特にクリミア半島の諸都市に関して、大きな富を生む場所となっていく、その大きな要因の 1 つが、イタリアの海洋諸都市、特にジェノヴァによる黒海交易の独占と、黒海航路の東方との連結であった。

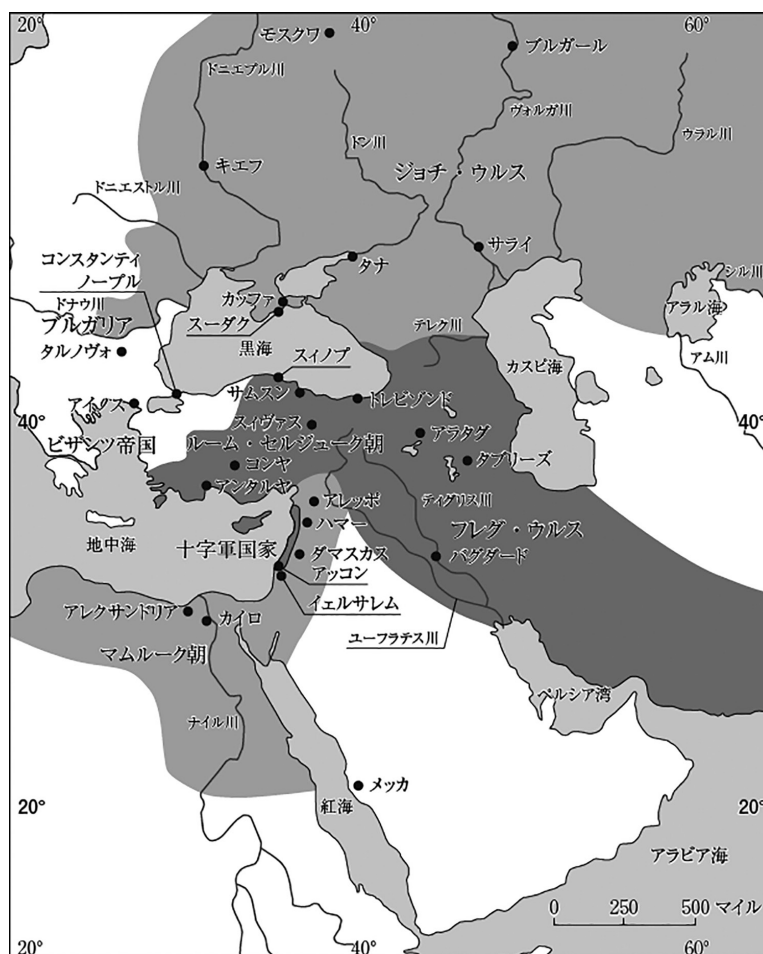
まずはジェノヴァの黒海政策についてのシェルバン・パパコスティアの最新の研究に依拠して概観したい。マムルーク朝の伸長により、東地中海がムスリムの海となっていくにつれ、ラテン・ヨーロッパにとって、東方の入り口としての黒海の重要性が相対的に上がっていく。第三次十字軍から軍は陸路ではなく海路を用いるようになっており、そこで力を発揮したのが、ヴェネツィア、ジェノヴァ、ピサ、アマルフィといったイタリアの海洋諸国家であった。こうした状況のなかで 1204 年の第四次十字軍はコンスタンティノープルを占領する。これによりラテン・ヨーロッパを内陸アジアへと直接つなぐ道が開かれた。この局面で商業を独占したのは、この地にラテン帝国 (1204 ~ 61 年) を打ち立てたヴェネツィアであった。そして以後黒海の覇権をめぐる、ヴェネツィアとジェノヴァとは激しく角逐することとなる⁽⁷⁴⁾。

1258 年 6 月、度重なる衝突の末にヴェネツィアとピサは、ジェノヴァを地中海岸の十字軍都市アッコから追い出すことに成功する。東地中海での失地を挽回すべくジェノヴァが目をつけたのが黒海であり、その交渉相手はラテン帝国に追われ、ニカイアに逃れていたビザンツ皇帝ミカエル 8 世パレオロゴス (治世 1259 ~ 82 年) だった。1261 年 3 月 13 日にニカイアの皇帝とジェノヴァとの間に結ばれたニンファエウム条約は、ビザンツ帝国のコンスタンティノープル回復によって、黒海の主権をヴェネツィアからジェノヴァへと移動させる。コンスタンティノープルに隣接する金角湾北岸のペラ (ガラタ) を 1267 年に獲得することによってボスフォラス海峡を押さえたジェノヴァは、その地を基盤に覇権を黒海岸全域に及ぼしていった。黒海北岸のジョチ・ウルス領内に関してはクリミア半島東岸、かつてギリシアの植民都市であったテオドシアの跡地に建設されたカッフアが最も重要なジェノヴァ人居留地となる。この地がその後の数 10 年に亘り「草原の道」の西端としてヨーロッパ交易の拠点となる。北岸のカッフアに対して南岸の要地はトレビゾンドであった。黒海とベル

74 Șerban Papacostea, “The Genoese in the Black Sea (1261–1453): Metamorphoses of a Hegemony,” in Ovidiu Cristea and Liviu Pilat, eds., *From Pax Mongolica to Pax Ottomanica: War, Religion and Trade in the Northwestern Black Sea Region (14th–16th Centuries)* (Leiden: Brill, 2020), pp. 13–14.

シア湾、さらにはインド洋からの交易路の交差点であったこの都市は、トレビゾンド帝国ヨハネス・コムネノス（治世 1282～97 年）の代にフレグ・ウルスの支配下に入ることユーラシア交易圏に組み込まれる。一方のヴェネツィアもアゾフ／タナを足掛かりに東方の富に手を掛けようとする【図 3】⁷⁵⁾。

こうした黒海交易の興隆とともに、ドニエストルおよびドナウ両水系を拠点とするジョチ家のノガイ（1299 年没）が台頭してくる。両河川が黒海へと注ぐモルダヴィア地方は、ジョ



【図 3 13 世紀後半の黒海とその周辺】

(Favereau, *The Horde*, p. 150 を基に作成)

75 Papacostea, “The Genoese in the Black Sea (1261–1453),” pp. 15–21. モンゴル帝国期の黒海をめぐるポリティクスに関しては、チオチルタンのモノグラフに詳しい。Ciociltan, *The Mongols and the Black Sea Trade in the Thirteenth and Fourteenth Centuries*. なお、日本語の概観も存在している。諫早庸一「キエフとモスクワのあいだ：前近代アフロ・ユーラシア史からの視界」『現代思想』50 巻 6 号、2022 年、262–270 頁。

チ・ウルスにとって中欧域との結節点という意味でも、両河に挟まれたブジャク草原が広大な牧草地を備える良質な冬営地であったという意味でもフレグ・ウルスの戦略上の要地であった⁽⁷⁶⁾。モンケ・テムル期においては〈中央〉たるヴォルガ水系の勢力とは距離のあったノガイであったが⁽⁷⁷⁾、1282年頃のモンケ・テムルの死後はヴォルガ水系の中央政界に積極的に関与することになる。マルコ・ポーロはノガイが次代トダ・モンケ（治世 1282～87年）を擁立したとすら述べており⁽⁷⁸⁾、『集史』にしても、クビライの子でジョチ・ウルス宮廷に留め置かれていたノムガンの送還はノガイとオルダ・ウルスの当主コニチとがトダ・モンケとの協議の上で決定したと語る⁽⁷⁹⁾。おそらくはこの時期までに、ノガイは黒海諸水系を越え、ヴォルガ水系にまで影響力を及ぼしていた⁽⁸⁰⁾。

その後もジョチ・ウルスの政局は大きく展開していく。『集史』はトダ・モンケがトラ・ブカを筆頭とするゴンチュクおよびモンケ・テムルの子アルグイとトゴリルチャら4王族によって廃され、以後5年に亘り彼らの共同統治が為されたとする。彼らはモンケ・テムルの別の子トクタに脅威を感じ、彼の排除を企図した。機先を制して逃れてきたトクタを奉じたノガイは⁽⁸¹⁾、ドニエプル川を渡って東進、トラ・ブカを打倒してトクタをジョチ家当主の座に就ける⁽⁸²⁾。

しかし、その後ノガイと袂を分かったトクタは最終的にノガイを排除する。ジョチ・ウルス史家の赤坂恒明が詳細に語るように、トクタはノガイの旧領に自らの諸子を配し、西方領域において自らの支配を固めていく⁽⁸³⁾。さらに東方領域においてもオルダ・ウルスの当主コニチが1298年に身罷っており⁽⁸⁴⁾、もはやトクタの一極体制を妨げるものはなかった。黒海

76 Favereau, *The Horde*, p. 189.

77 ただしその間にもノガイは独自外交を展開し、1270/71年にはバイバルスに書簡を送りマムルーク朝と直接交渉してもいる。Baybars al-Manṣūrī, *Zubdat al-fikra fī tārikh al-Hijra: History of the Early Mamluk Period*, ed. Donald Sidney Richards (Beirut: al-Ma'had al-almānī li al-Abḥāth al-Sharqīya, 1998), pp. 131–132; Favereau, *The Horde*, p. 193.

78 マルコ・ポーロ『世界の記』612頁; Favereau, *The Horde*, p. 191.

79 Rashīd al-Dīn, *Jāmi' al-tawārikh*, p. 896; Thackston, *Rashīduddin Fazlullah's Jami'u't-Tawarikh*, p. 438; 赤坂『ジュチ裔諸政権史の研究』155頁。バトの征西以後も東方に留まり、イルティシュならびにアラル海の諸水系を勢力圏とし、白帳（Aq Orda）たるバト・ウルスと並び立った青帳（Kök Orda）たるオルダ・ウルスについてはトーマス・オルセンが論じている。Thomas Allsen, "The Princes of the Left Hand: An Introduction to the History of the *Ulus* of Orda in the Thirteenth and Early Fourteenth Centuries," *Archivum Eurasiae Medii Aevi* 5 (1985 [1987]), pp. 5–40.

80 赤坂『ジュチ裔諸政権史の研究』176頁。

81 Rashīd al-Dīn, *Jāmi' al-tawārikh*, p. 741; Thackston, *Rashīduddin Fazlullah's Jami'u't-Tawarikh*, p. 363.

82 Baybars al-Manṣūrī, *Zubdat al-fikra fī ta'rikh al-Hijra*, pp. 285–286; 赤坂『ジュチ裔諸政権史の研究』176–177頁。これらの顛末については、近代以降初のモンゴル帝国通史を著したコンスタンティン・ドーソンが『モンゴル帝国史』のなかで、『集史』とシハーブ・アッ＝ディーン・アフマド・アン＝ヌワイリー（1279～1333年）のアラビア語博物誌『学芸の究極の目的（*Nihāyat al-arab fī funūn al-adab*）』に見える記述を訳出している。コンスタンティン・ドーソン（佐口透訳注）『モンゴル帝国史』平凡社、1968–79年、6巻、395–407頁。

83 赤坂『ジュチ裔諸政権史の研究』175–191頁。

84 オルダ・ウルスにおけるその後の後継者争いについては、例えばファヴロの記述を参照されたい。Favereau, *The Horde*, p. 212.

北岸とカスピ海北岸の政治統合は、カフカースの地政学上の位置づけを大きく転換させることになる。

ワッサーフがフレグ・ウルス宮廷に献じたペルシア語史書『都市の配分と時代の推移』(*Tajziyat al-amṣār wa tazjiyat al-a'ṣār*) (1328 年以降撰筆) は、フレグ＝ベルケ間の抗争の結果として閉ざされていた交易路が、トクタとフレグ・ウルスのガイハト (治世 1291 ～ 95 年) の時代には外交使節の往来が復活することで、再び開かれたことを伝えている⁽⁸⁵⁾。しかし、商業と外交の道は、軍事の道でもあった。ヴォルガ水系から黒海の西岸までを抑えたトクタが次に狙ったのが、バト以来フレグ・ウルスとの係争地であり続けた良質な冬营地アゼルバイジャンである。『集史』によればヒジュラ暦 702 年ジュマダー第 2 月 9 日 (西暦 1303 年 1 月 29 日)、テュルク暦 (= 中国暦) の新年においてトクタは 300 人からなる大使節団を繰り出して、時のフレグ・ウルス当主ガザン (治世 1295 ～ 1304 年) の許に至らしめた⁽⁸⁶⁾。『都市の配分と時代の推移』はトクタの使節が、アッラーンとアゼルバイジャンとを、チンギスがバトに与えたものであるとしてその割譲を求めたとする。ガザンはもちろん、その要求を撥ねつけている⁽⁸⁷⁾。この文脈において注目すべきこととして、『集史』はその前年にあたるヒジュラ暦 701 年の冬 (西暦 1301 ～ 02 年にかけて) にガザンが鉄門デルベンド付近において狩りに興じ、トクタがそれを警戒してデルベンド付近から兵を退いたことを伝えている。その後、フレグ・ウルス側が軍事遠征を企図していないことが分かり、商人たちの往来が再開したとする段の次に、この時期までカフカースの山岳地帯で反抗していたレズギ人たちがフレグ・ウルスに投降したことが伝えられる⁽⁸⁸⁾。

モンゴル帝国期カフカースに焦点を当てた著作が近年英訳されたロレンツォ・プブリッチは、そのなかでモンゴルのカフカース征服について主にアルメニアとグルジアといった南カフカースの王国に注視しながら議論を進める。その考察の年代幅は 1204 年から 1295 年にかけてとなっている。1204 年は上述の通り、コンスタンティノープルが第 4 次十字軍によって陥落させられた年であり、それはカフカースに対するビザンツ帝国の影響がほぼ完全に潰えた年であった。下限となる 1295 年はイランを統治したフレグ・ウルスにガザン・ハンが立った年である。ガザンは、北方のジョチ・ウルスとの境界を確たるものとし、ここにカフカースは二分されることになるというのがプブリッチの議論である⁽⁸⁹⁾。しかしまさに前段で示したように、山脈の向こう側にある北カフカースも含めてカフカース全体を考えるのであれば、下限はこれよりもやや後、この 1302 年頃に置かれるべきだと思われる。この時期に

85 Waṣṣāf al-Ḥaḍrat (Sharaf al-Dīn 'Abd-Allāh b. Faḍl-Allāh al-Shīrāzī), *Tajziyat al-amṣār wa tazjiyat al-a'ṣār*, ed. Muḥammad Mahdī Iṣfahānī (Bombay: 1853), p. 51 Peter Jackson, *The Mongols and the Islamic World: From Conquest to Conversion* (New Haven: Yale University Press, 2017), p. 219.

86 Rashīd al-Dīn, *Jāmi' al-tawārīkh*, p. 1309; Thackston, *Rashīduddīn Fazlullāh's Jāmi'u't-Tawārīkh*, p. 654.

87 Waṣṣāf al-Ḥaḍrat, *Tajziyat al-amṣār wa tazjiyat al-a'ṣār*, p. 398.

88 Rashīd al-Dīn, *Jāmi' al-tawārīkh*, p. 1302; Thackston, *Rashīduddīn Fazlullāh's Jāmi'u't-Tawārīkh*, p. 651.

89 Lorenzo Publici, *Mongol Caucasia: Invasions, Conquest, and Government of a Frontier Region in Thirteenth-Century Eurasia (1204 – 1295)*, trans. Andrew Smaldone (Leiden: Brill, 2022).

山岳民がモンゴル側に服することにより、カフカースはユーラシア交易圏に組み込まれることになる。

したがって 14 世紀初頭においてはすでに、前世紀にルブルクが恐れたカフカース山岳民の脅威は去っていた。そしてまさにこのタイミングこそが「新都市マージアル」が台頭する時期なのである。この時期のマージアルについて伝える史料は既述のものを除けばほとんどないが、ここでは古銭学の成果が利用できる。古銭学者のパヴェル・ペトロフは 14 世紀の初頭にジョチ・ウルス領内において貨幣流通が高まりを見せることを伝え、代表的な打刻地の 1 つとしてマージアルの名を挙げている。そしてマージアルでの打刻はトクタの時代に始まるのである⁽⁹⁰⁾。マージアルの台頭は明らかにトクタ期以降に顕在化するカフカースをめぐむ地政学上の転換に影響を受けたものであった。すでに述べたようにイブン・バットウータは黒海を渡ってクリミア半島に入り、そこから陸路マージアルに至っている。先のアブー・アル＝フィダーの引用文でマージアルが「ほぼ鉄門とアゾフの中間に」位置していたことを確認した。マージアルにはクリミア半島からの街道が走っていたのである⁽⁹¹⁾。交易路をハンの〈移動〉の道とすることは、商税・通行税といった諸税の徴収にも利するところがあったであろう。マージアルは——これもフレグ・ウルスにおけるタブリーズ同様——貨幣の打刻地かつ商業拠点でもあったのである。

そしてここで今一度「商業と外交の道は、軍事の道でもあった」というフレーズを繰り返したい。注目するのは戦争と季節のリズムである。トクタは、ノガイを敗死させた後も黒海諸勢力に対して強硬策を継続する。彼は 1307 年 11 月にはジェノヴァ人追放令を発令してその拠点であったカッファへと侵攻する。7 カ月あまりの包囲戦の後、ジェノヴァはカッファを放棄するに至った⁽⁹²⁾。さらに、1301 年から翌 2 年にかけてトクタがデルベンド付近へ侵攻していたことはすでに述べた通りである。このようにトクタは、クリミア半島とアゼルバイジャンの双方をにらむ形で軍事作戦を展開させていた。この戦略の下で、「ほぼ鉄門とアゾフの中間に」位置していたマージアルおよび北カフカースは軍事戦略上の要地となっていた。

そしてこの観点からは、季節のリズムが重要なものとなってくる。1307 年から翌 8 年にかけてのカッファ包囲戦にせよ、デルベンドへの侵攻にせよ、その軍事行動は冬に起こされている。ファヴロがすでに指摘しているように、冬は「モンゴルの戦争のシーズン (Mongol season of warfare)」⁽⁹³⁾であった。モンゴルのカフカース侵攻をこの目で見たキラコス・ガンザケツィ(1201～72 年)のアルメニア語史書『アルメニア人の歴史(Patmut'iwn Hayots)』は、

90 Pavel Petrov, "Jochid Money and Monetary Policy in the 13th–15th Centuries," in Rafael Khakimov, Vadim Trepavlov, and Marie Favereau, eds., *The Golden Horde in World History* (Kazan: Sh. Marjani Institute of History of the Academy of Sciences of the Tatarstan Republic, 2017), p. 622 n. 43.

91 German Alekseevich Fedorov-Davydov, *Zolotoordynskie goroda Povolzh'ia: Keramika, trgovlia,byt* (Moscow: Izd-vo. Moskovskogo universiteta, 2001), p. 205; Emma Zilivinskaja, "Caravanserais in the Golden Horde," *The Silk Road* 15 (2017), p. 14.

92 Marie Favereau, "The Golden Horde and the Mamluks," in Khakimov, *The Golden Horde in World History*, pp. 336–337.

93 Favereau, *The Horde*, p. 84.

フレグとベルケの戦争について、その戦闘時期について以下のように記している。

その後、彼ら（フレグとベルケ）は互いに5年間、アルメニア暦で710年から715年（西暦1261～1266年）まで戦った。兵を招集し、激突したのである。しかし、冬季のみにおいてであった。なぜなら、彼らは夏季においては暑さと川の洪水のため、戦うことができなかったのである⁽⁹⁴⁾。

特に黒海およびカスピ海の北岸に関してはルブルクの記述に依拠してすでにみたように、冬季には河川が凍ることで、ドニエプル川・ドン川・ヴォルガ川の下流域が結ばれ、大規模な軍事行動が可能となった。事実『集史』はノガイとの抗争期において「その冬」——ラシード・アッ＝ディーンの記述に従えばヒジュラ暦698年（西暦1298年から99年にかけて）⁽⁹⁵⁾——にトクタが30の万人隊とともにノガイとの戦闘へと赴いたものの、ドニエプル川が凍らず軍事行動を諦めたことを伝えている⁽⁹⁶⁾。このことは特にヴォルガ川から黒海北岸にかけての軍事遠征が冬の氷上移動を基調としたものであったことを教えてくれる。

アゼルバイジャンに関しても、特にアッラーン＝カラバグ平原はフレグ・ウルスが有する良質な冬営地であったことはすでに見た。先のトクタ以上に、次代ウズ・ベクは冬季に2度、この地に対して大規模な遠征を敢行している。ファヴロは、ウズ・ベクによる1318年と35年のこの2回の遠征を、いずれもフレグ家の君主交替期の混乱についての出兵だったとみている⁽⁹⁷⁾。一方でこの2度にわたるアゼルバイジャン遠征は、〈移動〉の性質そのものや気候変動という要素を見るうえでも興味深いものであるため、以下に詳述する。

第1次アゼルバイジャン遠征は、フレグ・ウルスの最後の統一君主となったアブー・サイード（治世1317～35年）の即位後まもなくのヒジュラ暦718年つまり西暦1318年から19年にかけての冬に敢行された。このウズ・ベクによる第1次アゼルバイジャン遠征について、最も明確に「718年の冬」と伝えるのは、『都市の配分と時代の推移』である⁽⁹⁸⁾。ムスタウフィーのペルシア語史書『選史（*Tārīkh-i guzīda*）』（1329/30年編）は、718年のラマダーン月（西暦1318年10月～11月）における諸將の謀反の兆しについて伝え、その後のウズ・ベク侵攻の件において、諸將の一部がこれを好機と見たとする⁽⁹⁹⁾。アブー・サイード死後の混乱期にジャラーイル朝君主シャイフ・ウワイズ（治世1356～74年）に捧げられたアブー・バクル・アル＝アハリーの『シャイフ・ウワイズ史（*Tawārīkh-i Shaykh Uways*）』（1360年頃）は、こ

94 Robert Bedrosian, *Kirakos Gandzakets'i's History of the Armenians* (New York: Sources of the Armenian Tradition, 1986), pp. 332–333.

95 ただし『学芸の究極の目的』はこれについて記さず、『集史』においてその後に記される両者の最初の衝突とトクタの敗北を、ヒジュラ暦697年（1297年11月～1298年10月）のこととしている。Shihāb al-Dīn Aḥmad b. 'Abd al-Wahhāb al-Nuwayrī, *Nihāyat al-arab fī funūn al-adab*, vol. 27 (Cairo: al-Hay'at al-miṣriyyat al-'āmmat li al-kitāb, 1985), p. 370；ドーソン『モンゴル帝国史』6巻、399頁。ファヴロもこの最初の衝突を1297年から98年にかけての冬とするが、そこで引かれる史料は『集史』となっている。Favereau, *The Horde*, p. 201.

96 Rashīd al-Dīn, *Jāmi' al-tawārīkh*, p. 745; Thackston, *Rashīduddīn Fazlullāh's Jami' u't-Tawarikh*, p. 364.

97 Favereau, *The Horde*, p. 231.

98 Waṣṣāf al-Ḥaḍrat, *Tajziyat al-amṣār wa tazjiyat al-a'ṣār*, p. 635.

99 Mustawfī, *Tārīkh-i guzīda*, pp. 613–614.

の遠征をヒジュラ暦 717 年（西暦 1317 年 3 月～1318 年 3 月）と 18 年とにまたいで記述しており、ウズ・ベクが先帝オルジェイトの死を知って遠征を企図したことを伝えている。その上で、ウズ・ベク撤退後のアブー・サイードによる追撃戦を、ヒジュラ暦 718 年のこととしている⁽¹⁰⁰⁾。こうした諸史料の記述をみても、ウズ・ベクがフレグ・ウルス領の政治状況について情報を集め、遠征の機会を虎視眈々と狙っていた様子がうかがえる。そしてその目標は冬営地たるアゼルバイジャンのアッラーン＝カラバグであった。「戦争のシーズン」ならびに同地の冬営地としての性質に鑑みて、この地への遠征が冬季に行われたことは自然といえる。

一方でファヴロが指摘していない点として、異常気象とそれにとまなう経済危機にも言及することができる。『都市の配分と時代の推移』は、1318 年から 19 年にかけての冬においてアゼルバイジャンでは「かつてないほどに」雨と雪と雷とが激しく、家畜が斃れ物価が高騰したと伝えている⁽¹⁰¹⁾。そしてこの時期の異常気象と経済危機とはアゼルバイジャンのみならず、フレグ・ウルス領の広域を覆うものであった。これについての記述の重要な典拠となるのはモンゴル帝国の外側、マムルーク朝史家のムハンマド・ブン・ユースフ・アル＝ビルザーリー（1267～1339 年）の手になるアラビア語年代記『両庭園の書続編（*al-Muqtafi 'alā Kitāb al-rawdatayn*）』である。ビルザーリーは、イルビル出身の学者イッズ・アッ＝ディーン・ハサン・ブン・ザファル（1326 年没）からの伝承として⁽¹⁰²⁾、この時期のフレグ・ウルス領の物価高騰とその気象要因を詳述している。それに拠れば、ヒジュラ暦 718 年にはディヤールバクルやモスル、イルビルやマルディーンといった地方で物価が高騰した。ジャズィーラ地方ではこの年の初め（西暦 1318 年 3 月）からラビーウ第 2 月の終わり（同年 6 月）までで 15,000 人もの人々が飢餓や疫病で命を落としたとされている。イルビル地方では 400 戸もの人々がマラーガへと向かったものの、途中の雪と激しい寒さのために全員が死んだ。

これらの物価高騰の原因は、まずは 716 年（西暦 1316～17 年）にディヤールバクルとスィンジャールとでおこった蝗害であり、その後、717 年（西暦 1317～18 年）には旱魃が物価を高騰させた。718 年に入ると物価高騰はさらに激しくなったという。その年のラジャブ月からラマダーン月まで（西暦 1318 年 8 月～11 月）には死者の数は減ったものの、モスルやイラクでは引き続き物価が高騰していたとされている⁽¹⁰³⁾。このように、ウズ・ベクの第 1 次アゼルバイジャン遠征は、1318 年から 19 年にかけての冬というフレグ・ウルス領内が天候不順とそれにとまなう飢饉・疫病にあえぐ時期、あるいはその直後に敢行されているの

100 Aharī, *Tawārīkh-i Shaykh Uways*, pp. 208–209.

101 Waṣṣāf al-Ḥaḍrat, ed., *Tajziyat al-amṣār wa tazjiyat al-a'ṣār*, p. 637.

102 この人物に関しては、マムルーク朝治下シリアの学者イブン・カスィール（1300 頃～73 年）のアラビア語年代記『始まりと終わり（*al-Bidāya wa al-nihāya*）』のなかに伝記が収録されている。Ibn Kathīr, *al-Bidāya wa al-nihāya* (Cairo: Maktabat al-sa'āda, 1931), vol. 14, p. 125.

103 Muḥammad b. Yūsuf al-Birzālī, *al-Muqtafi 'alā Kitāb al-rawdatayn*, ed. 'Umar Tadmurī (Cairo: al-Maktabat al-miṣrīyat, 2006), vol. 4, pp. 303–304. ドーソンは、『両庭園の書続編』を引用する『学芸の究極の目的』を典拠として、この時期の飢饉に言及している。Nuwayrī, *Nihāyat al-arab fī funūn al-adab*, vol. 32 (Cairo: Dār al-wathā'iq al-qawmīya, 1998), pp. 290–292；ドーソン『モンゴル帝国史』6 巻、298–299 頁。

である⁽¹⁰⁴⁾。

その後の第2次アゼルバイジャン遠征は、ヒジュラ暦736年のことであった。アハリーは、ウズ・ベクの侵攻を受けて冬営地であるアッラーン＝カラバグへと進軍したアブー・サイードが、ヒジュラ暦736年ラビーウ第1月（西暦1335年10月～11月）に陣中で身罷ったことを伝える⁽¹⁰⁵⁾。メルヴィルはこのタイミングでのウズ・ベク軍の侵攻に関して、フレグ・ウルスの弱体化が隣国にも知れていた可能性に言及している。アラビア語史料のなかにはアブー・サイードがすでに8月には体調不良を来たしていたとするものもあり、それは彼がウズ・ベク征討に出る9月に先立つものであった⁽¹⁰⁶⁾。この種のウズ・ベクの素早い動きは、夏季にヴォルガ川を北上して夏営しては果たせなかったと思われる。この年においてもおそらくウズ・ベクは北カフカースにて夏営し、秋から冬にかけてアゼルバイジャン遠征を敢行した可能性が高い。

興味深いことに、この第2次アゼルバイジャン遠征に関しても、天候不順が伝えられている。しかしこの遠征に関して、それはウズ・ベクを利する方向へは働かなかった。ウズ・ベクの侵攻と同じ月に彼をイランに誘導した咎でバグダード・ハトゥンが処刑されたことを伝えるアハリーはさらに、ウズ・ベクがアブー・サイードの崩御を知って再度侵攻してきたこと、その一方でこの年は「雨が少なく（*amsāk-bārān*）」、糧食が不足していたため、渡河がかなわないままにウズ・ベクが撤退していったことを伝えている⁽¹⁰⁷⁾。ただし、アブー・サイードの死の前後に編纂されたペルシア語史書『系譜集成（*Majma' al-ansāb*）』（1335/36年編）の著者シャバーンカラーイー（1293/94年生）は同じくウズ・ベクによる再度の侵攻を伝えつつ、天候不順ではなくウズ・ベク軍の軍馬がその地の馬草を食べて大量死したために、撤退を余儀なくされたことを語っている⁽¹⁰⁸⁾。天候不順が理由であれ、植生が理由であれ、糧食

104 ちなみに、過去2000年の夏季（6～8月）の北西ヨーロッパおよび地中海世界の乾湿を、緯度／経度0.5度刻みのグリッドで表現した旧世界旱魃アトラス（Old World Drought Atlas: <http://drought.memphis.edu/OWDA/Default.aspx>）では、1315年と1317年の夏にアナトリアからシリアにかけて深刻な旱魃があったことが示されており、この気候データは上述の文献データとよく合致する。宇野伸浩「初期グローバル化としてのモンゴル帝国の成立・展開」弘末雅士・荒川正晴（責任編集）『モンゴル帝国と海域世界：12～14世紀』（岩波講座 世界歴史 第10巻）岩波書店、2023年、32頁。

105 Aharī, *Tawārīkh-i Shaykh Uways*, p. 217.

106 Charles Melville, *The fall of Amir Chupan and the Decline of the Ilkhanate, 1327–1337: A Decade of Discord in Mongol Iran* (Bloomington: Research Institute for Inner Asian Studies, 1999), p. 43.

107 Aharī, *Tawārīkh-i Shaykh Uways*, p. 218.

108 Muḥammad b. 'Alī b. Muḥammad Shabānkārā'ī, *Majma' al-ansāb*, ed. Mīr Hāshim Muḥaddith (Tehran: Mu'assasa-yi Intishārāt-i Amīr Kabīr, 1984), p. 294. ちなみにウズ・ベク軍が展開したムーガン草原（アッラーン＝カラバグ）に関して、『心魂の歓喜』でムスタウフィーは「ミシュキーンのテュメンの向かいにある岩々の小丘からアラス河畔までがムーガン地方である。ここからサバラーン山が見えないと、ディルマナ草は秋には有毒になり、それを食べる獣は死ぬ。春にはその毒性が落ちて空腹の動物が他の牧草を食するより害になる程度である。サバラーン山が見えるようになるとそのディルマナにはそのような害はなくなる」としている。Mustawfī, *Nuzhat al-qulūb*, p. 90; 井谷鋼造「Nuzhat al-Qulūbに見えるアゼルバイジャン周辺の諸地方」『東洋文化学科年報』4号、1989年、75頁。

の問題でウズ・ベクが撤退した点について同時代史料は共通する。

ここでは第1次、第2次遠征ともに、アゼルバイジャンのアッラーン＝カラバグへと遠征したウズ・ベクが、クラ川を越えることがなかった点に注目したい。ここからは、ウズ・ベクがアッラーン＝カラバグを突破や通過の対象としてよりは、冬営地として滞在の対象とみていたことが窺えるように思われる。これはより推測を重ねることにもなるが、天候不順によってヴォルガ下流域以上に降雪の少ないアゼルバイジャンへと南下してきた可能性もある⁽¹⁰⁹⁾。第2次遠征に際しての馬草の問題も、この地に一定期間駐留していたからのことであろう。『系譜集成』はこの時の遠征に関して、対峙した45日間のうちで実際に戦闘が行われたのは2～3日であったことを伝える⁽¹¹⁰⁾。カフファ包囲にせよアゼルバイジャン侵攻にせよ、それはその地を攻めると同様に、冬季においてオールドゴとその地に滞在するものであった。

そして、このウズ・ベクにとっての前線であり逗留地としてのアゼルバイジャンの位置づけは、次代ジャーニー・ベクの遠征との対比のなかで際立ったものとなる。1335年にアブー・サイドが亡くなるとフレグ・ウルスは内訌期に入り、カフカースには再び地政学上の転換期が訪れる。この混乱の最中、ジャーニー・ベクは1357年にアゼルバイジャンを破り、タブリーズを陥落させる。アブー・サイド死後のフレグ・ウルスの政治状況を知るうえで重要な史料である『ジャラーイル朝史（選史続編）』は、その紹介・校訂を為した大塚修が述べるように、他の史料以上に細かい日付を載せることを特徴の1つとしている⁽¹¹¹⁾。この史料に拠れば、ジャーニー・ベクがデルベンドを越えたのはヒジュラ暦758年ジュマダー第2月12日（西暦1357年6月2日）のことであり、冬季遠征のパターンを踏襲してはいない。この時の遠征の主眼は——まさに達成されたように——チョパン朝君主マリク・アシュラフ（治世1343～57年）の打倒であり、冬営地アッラーン＝カラバグへの駐留ではなかった。事実、クラ川の渡河に時間をかけなかったジャーニー・ベクは、夏営地であったウージャーンへ軍を向け、おそらくその地の近郊でマリク・アシュラフと戦っている⁽¹¹²⁾。

積年の悲願を果たし、タブリーズに入場したジャーニー・ベクはしかし、7月27日には息子のベルディ・ベクをこの地の王位に就けると、すぐに自領へと帰還する。季節のリズムに沿わない遠征は、おそらくこの地への長期滞在を想定したものではなかった。ベルディ・ベクもまた敵が勢力を盛り返すなかで、9月初頭にはタブリーズを後にする⁽¹¹³⁾。そし

109 これらの地域の降雪量の対比については、シャミルオグルが言及している。彼に拠れば、ウラル山脈の東側に広がる北方の草原地帯は、年間の実に180日が雪に覆われる世界である。これが後代ジョチ・ウルスの支配領域ともなる南方草原では120日ほどとなる。ウラル山脈を越えて西側の草原地帯に行っても、その北方では年間140日余り降雪があるものの、黒海沿岸にまで至れば降雪はわずかに40日、アゼルバイジャンやクリミアに至ってはそれよりもさらに少なくなるのである。Uli Schamiloglu, “Climate Change in Central Eurasia and the Golden Horde,” *Golden Horde Review* 1 (2016), pp. 8–9; 諫早『ユーラシア史のなかのモンゴル帝国』。

110 Shabānkārāi *Majmaʿ al-ansāb*, p. 294.

111 大塚修『『選史』続編の研究：新出史料『ジャラーイル朝史（選史続編）』を中心に』『アジア・アフリカ言語文化研究』85号、2013年、184頁。

112 しかし、この戦闘の日付は、デルベンド越えの2日「前」となっており、クロノロジーに多少の混乱が見られる。大塚修『『選史』続編の研究』196頁。

113 大塚修『『選史』続編の研究』197頁。

てジャーニー・ベクはタブリーズからの帰路、ヴォルガ川上の船のなかで亡くなり、後を継いだベルディ・ベクも 1359 年に死去する。バト家は断絶し、ジョチ・ウルスも無政府状態の混乱に陥るのである⁽¹¹⁴⁾。

もちろんウズ・ベクからジャーニー・ベク、ベルディ・ベクの時代においても首府はサライにあり、そこを冬営地としてハンがヴォルガ流域を南北移動していたことを否定する史料はない⁽¹¹⁵⁾。したがって依然としてこの地域はウルスの「中核圏」であった可能性が高い。一方でそれは先行諸研究が想定するような固定的・単層的なものではなかった。おそらくはトクタの時代以降の地政学的な転換を反映し、トクタやウズ・ベク、ジャーニー・ベクといった後代のハンたちは少なくとも一定期間においてヴォルガ下流域と北カフカースのあいだを東西移動していたと思われる⁽¹¹⁶⁾。第 1 節で触れたデュラン＝ゲディの三分区分を援用すれば、ヴォルガ下流域が「中核圏」であり、軍事行動を念頭に置いたサライと北カフカース、さらには時としてクリミア半島やアゼルバイジャンへと延びるラインが「通過圏」、そしてその他、君主が足を運ぶことのないウラル川以東や中核圏の北側の森林地帯が「遠隔圏」ということになる。ジョチ・ウルス君主たちの〈移動〉もまた、フレグ・ウルス君主たちのそれと同じく重層的であり、また政治的な判断でもって変動する類のものであった。

結びに代えて —— 南北移動と東西移動をつなぐ ——

本稿はジョチ・ウルス史を特に君主の〈移動〉の観点から再考するものであった。その問いは、当該ウルスの君主の〈移動〉が、これまで語られてきたような固定的なものであった

114 バト朝の断絶の一因とされているのが黒死病である。そもそもジャーニー・ベクがアゼルバイジャンで打ち破ったマリク・アシュラフに関して、彼は諸史料において「暴君」として描かれているが、この時代において黒死病がアゼルバイジャン地方で猛威を振るっていたことが知られる。Ahmad Fazlinejad and Farajollah Ahmadi, “The Black Death in Iran, according to Iranian Historical Accounts from the Fourteenth through Fifteenth Centuries,” *Journal of Persianate Studies* 11 (2018), pp. 62–66. その苛政の少なくとも一部は、人災に帰せられるものではなかった。ジョチ・ウルスにおける黒死病の被害については、シャミルオグルの論考がある。Uli Schamiloglu, “The Impact of the Black Death on the Golden Horde: Politics, Economy, Society, Civilisation,” in Khakimov, *The Golden Horde in World History*, pp. 674–688.

115 ただし冬営地サライも——いずれもヴォルガ下流域ではあるが——また旧サライから新サライへと〈移動〉したとされている。それについての最新の議論は、ジョチ・ウルス史家の長峰博之によるものである。長峰博之「サライはどこに? : ジョチ・ウルスの「首都」サライをめぐる近年の研究動向によせて」『西南アジア研究』95 号、2022 年、76–100 頁。

116 ジャーニー・ベクもまたカフファ包囲を敢行している。まずは 1344 年 2 月 (Hannah Barker, “Laying the Corpses to Rest: Grain, Embargoes, and *Yersinia pestis* in the Black Sea, 1346–48,” *Speculum* 96, no. 1 (2021), pp. 112–113)、続いて長期戦となった第 2 次包囲に関しては 1345 年 1 月頃から準備が始められ、包囲が実際に開始された時期は明らかでは無いものの、恐らくは 7 月から 12 月の間と考えられている。Barker, “Laying the Corpses to Rest,” pp. 115–117. 包囲の終了は 1346 年秋から 1347 年春までのいずれかの時期であった。そして、よく知られているように、この包囲は黒死病のヨーロッパへの伝播と密接な関係を有している。Barker, “Laying the Corpses to Rest,” p. 119.

のかというものであった。第1節では、前提として問いの意義を検討した。モンゴル帝国期のなかでも特に統一帝国期やフレグ・ウルスについて、君主による「帝国の巡行」を分析する近年の先行研究は、それが「移動牧畜」とは必ずしも一致しないと結論づけていた。政治的な情勢等々を反映して〈移動〉の経路は変化しており、またどの経路をとるかに関してもその頻度にグラデーションが存在していたのである。しかしながらこれらの研究もまたジョチ・ウルス君主たちの〈移動〉に関しては、それをヴォルガ下流域の南北移動に固定されたものと考えていた。こうした理由から、本稿ではジョチ・ウルスの君主の〈移動〉の経路の変化に関する問いを立てたのである。

第2節では、ジョチ・ウルスのハンたちの南北移動について、先行研究で用いられてきた史料群を振り返った。貴重な証言となってきたのは、このウルスに外側から入った使節や旅行者たちの記述である。バト宮廷を訪れたカルピニやルブルク、ベルケ宮廷を訪れたマルコ・ポーロらの外来者たちは、こうした君主たちがヴォルガ下流域のサライを冬営地として、夏は北上してウケク、あるいはブルガールまでも至っていたことを伝えている。

一方で第3節は、南北移動以外の〈移動〉に焦点を当てた。これに関して、北カフカースの都市マージアルにいたウズ・ベクのオールドを訪問したイブン・バットウータの記述が貴重であった。この記述はかねてより知られており、ロシア考古学の分野にはマージアルとジョチ・ウルス君主たちの〈移動〉とを結びつける研究が存在していた。本稿ではそれらの研究を、特にウズ・ベク期の〈移動〉の文脈で精査し、どの研究の結論にも一長一短があることを確認したうえで、以下のように結論づけた。マージアルはウズ・ベクにとって——近隣のビシュ・ダグを含めた域圏としての——夏営地かあるいはフレグ・ウルスの「国都」タブリーズに比せられる重要な「通過点」であったのである。さらに、イブン・バットウータのクロノロジーの問題や、ウズ・ベクがヴェネツィアに発給した文書を手掛かりに、その〈移動〉が北カフカースを東西に横断するものであった可能性も指摘した。

こうした前提のうえで第4節は、初期の君主たちの南北移動とウズ・ベクの東西移動の連結を図った。本稿では、連結の鍵となるのはベルケを継いだモンケ・テムル期以降の黒海をめぐるポリティクスであり、それに影響された北カフカースの地政学上の転換であったことを主張した。1261年以降のジェノヴァによる黒海進出を重要な契機として、クリミア半島は東西交易路の要地となっていく。最初に黒海岸に影響圏としたジョチ家のノガイを打倒したトクタは、これまでのヴォルガ下流域に加えて、黒海の北岸にも直接に影響を及ぼしていく。このようにカスピ海北岸と黒海北岸とがハンの支配圏となっていくことで、両者をつなぐ北カフカースの重要性が増していく。本稿はまた、君主の〈移動〉を商業の観点から見るべきことも主張した。「新都市マージアル」の興起が1250年代から60年代と、黒海交易の隆盛と軌を一にしていることは決して偶然ではない。その後、マージアルが交易都市として繁栄を見せるのは13世紀末から14世紀初めにかけてであった。この時期にトクタは貨幣改革を行ったが、マージアルは打刻地としてその中心にあった。この時期には北カフカースの山岳民もモンゴルに服属するようになり、北カフカースは交易路の通る商業拠点として活況を呈するようになったのである。

しかし、「商業と外交の道は、軍事の道でもあった」。トクタは冬季にカフファを包囲し、またデルベンドにも遠征を行っている。ウズ・ベクによる2度のアゼルバイジャン遠征も冬

季に行われた。モンゴルにとって冬は「戦争のシーズン」であった。そして地政学上の転換以後、ジョチ・ウルスの君主たちの軍事作戦はジェノヴァを相手としたクリミア半島や、フレグ・ウルスを相手としたアゼルバイジャンを主眼とするものとなっていった。こうした軍事戦略のなかで「ほぼ鉄門とアゾフの中間に」位置していたマージアルは戦略上の要地であった。クリミア半島にせよ、アゼルバイジャンにせよ、冬季にそれらの地に遠征を敢行するためには、ヴォルガ川を夏に北上していたのでは遠すぎる。北カフカースはその意味でこの種の軍事戦略により適した位置にあったと思われるのである。後代のジョチ・ウルスの東西移動はこの種の地政学上の転換とそれに基づいたハンたちの軍事戦略に沿ったものであった。

このように本稿の試みは、黒海をめぐるポリティクスの変化にともなう北カフカースの地政学上の転換に注目することで、ジョチ・ウルスの南北移動と東西移動とを整合的につなぐことであった。モンゴル帝国君主の〈移動〉を、遊牧という観点からのみならず、政治・商業・軍事に気候変動も絡めた形で分析することもまた、モンゴル帝国という〈移動〉の帝国の特質を見極めるうえで重要な試みであると考えられる。君主の〈移動〉の分析は史料の極めて限られたジョチ・ウルスにおいても、内部の歴史と対外史を含めた歴史学のみならず、考古学や古銭学、古気候学などの分野の知見を組み合わせることで可能となる。本稿は、その可能性の一端を示す試みの1つである。

【謝辞】

本稿は、科学研究費基盤研究B「14世紀の危機」についての文理協働研究（代表者：諫早庸一）、科学研究費基盤研究A「前近代海域ヨーロッパ史の構築——河川・島嶼・海域ネットワークと政治権力の生成と展開」（代表者：小澤実）の研究成果の一部である。またこの原稿の基になった3報告「三水系の帝国——ジョチ・ウルス、北方シフト、草原の道」（第6回海域ヨーロッパ研究会、2020年12月19日）、「三水系の帝国としてのジョチ・ウルス」（北海道中央ユーラシア研究会第141回例会、2021年8月26日）、「両海の覇者たち——ジョチ・ウルスにおける〈移動〉のポリティクス」（第58回野尻湖クリルタイ〔日本アルタイ学会〕、2022年7月16日）では、それぞれの参加者から貴重な御意見を頂戴した。ここでは特に第2報告のコメンテータを務めて下さった長峰博之氏の御名前を挙げることで、感謝の表明とさせていただきたい。また匿名の査読者の方々の丁寧なコメントにもこの場を借りて御礼申し上げる次第である。

The “Imperial Itinerance” in the *Ulus* of Jochi

ISAHAYA Yoichi

The nomadic empires—which culminated in the Mongol Empire (1206–1368) in terms of scale—are characterized by high mobility in the sense of constant movement of the power center. In common with most of the khans of the Mongol Empire, the khans of the *Ulus* of Jochi (Golden Horde) were itinerant monarchs who made seasonal movements especially between winter and summer quarters. Recent scholarly insights have differentiated “imperial itinerance”—whether it be the period of the united empire or later—from “mobile pastoralism” on the grounds that the former was certainly freed from exclusive dependence on the pastoral economy. In the case of Jochid khans, however, a paucity of sources allows us only to glimpse the itineraries of earlier khans like Batu (r. 1227–56) and Berke (r. 1257–66) according to which they engaged in north-south movements along the Lower Volga down to Sarāy in winter and up to Ügek or further to Bulghār in summer. Such seasonal rounds have been deduced from the reports of Latin visitors such as Carpini (ca. 1182–1252), Rubrouck (1215–ca. 65), and Marco Polo (1254–1324) with Arabic geographical description by Abū al-Fidā’ (1273–1332) and al-‘Umārī (1301–49). These premises form a research question as to whether, or not, the itineraries of the Jochid khans were fixed along with the Lower Volga without any variety that was well found in cases of other khans’ “imperial itinerance” mainly due to political reasons.

To address a variety of itineraries, the travelogue of Ibn Baṭṭūṭa (1304–68 or 77) is worthy of attention. After landing on the Crimea across the Black Sea, he visited the horde of Özbek (r. 1313–41) located near Mājar, a city along the Kuma River in Northern Caucasus in May 1332, ’33, or ’34. As far as extant sources are concerned, Özbek seems not to have been in military operation at that time; rather, Ibn Baṭṭūṭa’s description of the horde shows certain parallels with that of Rubrouck who depicted Batu’s mobile court on his seasonal round. These circumstances enable me to propose the hypothesis that later Jochid khans might have engaged in Volga-Caucasian latitudinal movement as a part of their seasonal rounds with longitudinal movement along the Lower Volga.

The aforementioned Latin visitors, who inform us of the itineraries of earlier Jochid khans, did not at all refer to Mājar. Such lack of mention is attributed to the fact that, in the middle of the thirteenth century, mountainous peoples of Caucasus such as the Lezgins fiercely resisted the Mongol rule of this region, which did not ensure the safety of roads, let alone that of khans’ seasonal rounds in Caucasus. However, geopolitical transformation since the reign of Möngke-Temür (1266/67–82) centered Caucasus in Jochid military, diplomatic, and commercial strategies. This transformation came with the rise of Black Sea trade that brought prosperity to cities along commercial roads between the Black Sea and the Caspian Sea. In the reign of Toqto’a (1291–1312) who exerted more direct control over the northerly shores of the two seas, the political situation in Caucasus settled as trade routes were established through the region, which restyled Mājar into a thriving commercial center. The city also commanded a strategic position as a point almost midway between Azov and Derbend, the Iron Gate. Toqto’a must have benefited from the location of Mājar to conduct military operations both to Caffa and Azerbaijan. These facts lead me

to conclude that later Jochid khans such as Toqto'a, Özbek, and Janibek (r. 1341–57) had an alternative option, which passed through Northern Caucasus, to that along the Volga in their seasonal rounds. The geopolitical transformation necessitated varying their “imperial itinerance” as in the cases of the other Mongol *uluses*.